行幸編

小笠原島總覽

桔梗科 …… 一
使君子科 …… 一
商陸科 …… 一
山茂樫科 …… 一
葡萄科 …… 一
毛蕊科 …… 一
芭蕉科 …… 一
紫茉莉科 …… 一
蘿摩科 …… 一
鳳梨科 …… 一
鳶尾科 …… 一
莎草科 …… 一
石竹科 …… 一
山藤科 …… 一
菊科 …… 一二四

昭和二年七月三十日。三十一日

聖上陛下、小笠原島　行幸の御儀は、國史上無前の　御盛典にして、而して本島歴史の上に特筆大書して、以て後代に傳へ奉るべき所。今、本書の編纂に當り、恰かも此の　御盛典の顚末を錄し、謹みて之れを記念し奉るべき好機會を得たるを喜び、茲に『行幸編』を述ぶ。

第一篇　前記

第一章　行幸御日程

聯合艦隊の戰闘射撃と爆撃實驗御覽の爲め　行幸の砌、小笠原島へも　行幸あらせらるる旨　仰出された。御日程は左の通りである。

昭和二年七月二十八日(木曜日)

午前八時三十五分赤坂離宮御出門　八野五十五分東京驛御發車　十時二十五分横須賀驛御着車　軍艦山城に御座乘　十一時三十分横須賀軍港御出港　御海航

七月二十九日　御航海

七月三十日　午前八時三十分、小笠原島二見港御入港

九時十五分、艦載水雷艇に御乘艇、九時三十分、父島大村假棧橋より御上陸　大村尋常高等小學校、父島要塞司令部を經て、十時十五分、小笠原支廳御着　拜謁奏上の御儀ありて、陳列の物産御覽、農場御通過の後、十一時十分、綠蠵龜蕃養場御

覽　十一時三十五分、大村假棧橋より御乘艇御歸艦

午後一時、御微行にて、艦載水雷艇に御乘艇、途中傳馬船に御乘替　一時十五分、大村字清瀨東洋捕鯨株式會社小笠原事業場の假棧橋より御上陸、綠蠵龜卵孵化場御通過の上、字奥村歸化人部落御視察　御歸途父島海軍無線電信所前高地に御昇坂、二見港内外の形勢御覽　午後二時、前記假棧橋より御乘艇、二見岩の南方に設備せる網籠御覽、次に附近海中御視察、水產物御採集の上、三時三十分扇浦假棧橋より御上陸、小笠原島開拓記念碑御覽、四時、連珠谷御着、植物御採集　五時、扇浦假棧橋より御乘艇、洲崎方面御視察再び二見岩附近に御巡航あらせられ、六時三十分、御歸艦、御碇泊

七月三十一日　午前八時、小笠原島父島二見港御出港　十時三十分、母島沖港御入港、十一時、艦載水雷艇に御乘艇、途中傳馬船に御乘替、十一時十五分、沖村假棧橋より御上陸　沖村尋常高等小學校、ロース石山御視察　十一時五十分、沖村假棧橋より御乘艇、午後零時、御歸艦

午後一時、御微行にて、艦載水雷艇に御乘艇、沖港外南京濱御視察、海中御視察水產動物御採集　六時、御歸艦、御碇泊

八月一日　午前八時、母島沖港御出港　九州佐伯灣に向け御航海

同　二日　御航海

同　三日　午前九時佐伯灣御入港、同灣御碇泊

同　四日　朝、佐伯灣御出港、豐後水道沖に於て、聯合艦隊の晝夜間戰鬪射擊御覽

夜、佐伯灣御入港、同灣御碇泊

同　五日　朝佐伯灣御出港、豐後水道沖に於て聯合艦隊の爆擊實驗御覽

夕、豐後水道沖御發　御航海

同　六日　午後零時三十分、鹿兒島縣奄美大島名瀨沖御着、名瀨町御上陸

同四時　同名瀨沖御發

同七時　同奄美大島古仁屋港御入港、古仁屋港御碇泊、風波荒きときは名瀨沖御寄航並名瀨町御上陸御取止めのことあるべし。

同　七日　古仁屋御上陸、古仁屋御碇泊

同　八日　午後四時、古仁屋港御出港、御航海

同　九日　御航海

同　十日　午後二時、横須賀軍港御入港、御上陸　三時十五分、横須賀驛御發車　四時四十分東京驛御著車

還幸

七月三十日、小笠原附近御著の際風波荒きときは同島御立寄御取止めの上鹿兒島縣有明灣に御寄港のことに御變更八月三日午前九時佐伯灣御入港あらせらる。

第二章　御召艦及供奉艦

艦種	艦名	長サ	排水量	速力	大砲	發射管	進水年	建造地
戰艦	山城	巾 六三〇・〇 呎 九五・〇	三〇、六〇〇 噸	二三・五 節	三六糎一二、一五糎一六 八糎高角四	六	大正四年	横須賀
一等海防艦	春日	三四四・一	七、七〇〇	二〇・〇	二五糎一、二〇糎二、一五糎一四、機銃二、八糎八、八糎高角一	四	明治三六年	英國ア社
一等驅逐艦	羽風	三二〇・〇	一、三四五	三四・〇	十二糎四、機銃二	六	大正九年	舞鶴
同	秋風	三二〇・〇	一、三四五	三四・〇	同	六	同	長崎三菱
同	太刀風	三二〇・〇	一、三四五	三四・〇	同	六	大正一〇年	舞鶴
同	帆風	三二〇・〇	一、三四五	三四・〇	同	六	同	同

備考　一等海防艦は七千噸以上、一等驅逐艦は一千噸以上で、山城乘組の人員は準士官以上七十七人下士官兵千三百十四人である。

第三章　供奉員

親勅任官	奏任官	判任官	雇員	傭人
供奉長官 宮内次官 關屋貞三郎	行幸主務官 宮内書記官 木下道雄	宮内屬 河井十吉	仕人 淺見淺吉	省丁 谷津田三善
侍從長 伯爵 珍田捨巳	侍從 子爵 黑田長敬	同 小野武晴	同 川崎藤吉	同 加藤安光
侍從武官長 陸軍大將 奈良武次	侍從 山縣辰吉	同 富士川金二	同 佐藤省吾	同 小林壯三郎
侍從 子爵 土屋正直	侍從武官 海軍大佐 住山德太郎	侍從職雇員 小見清二	同 伊藤武朝	同 鈴木晃平
侍從 伯爵 甘露寺受長	侍從武官 陸軍歩兵中佐 矢野機	侍從職囑託 眞田浩男	同 柴田民平	同 桑田辰吉
侍從武官 海軍少將 今村信次郎	侍醫 八田善之進	同 伊丹寅治	膳手補 中村繁二	厨丁 關口增三
侍從職御用掛 主馬頭 西園寺八郎	侍醫 村上浩一	同 爲ヶ谷秀五郎	厨司 根本良助	
	皇宮警視 坂口鎭雄	同 川越憲雄	同 中島傳次郎	
	宮内省御用掛 服部廣太郎	同 河本藤太郎	同 瀧澤彌重次	
		主膳 枝川善則	藥手 大谷厚造	
		膳手 海老原長三		
		藥劑員 日根野弘勝		
		陸軍屬 小關政之助		
		宮内技手補 小川清一		
		宮内技手補 一人		
計 七	内閣書記官 横溝光暉	内閣屬 森省三	内閣雇 清水東鄕	
	一〇	一七	一一	六

第四章　奉迎施設（上）

第一節　奉迎に關する事項

（一）團體及一般奉迎者

官公吏・其他の團體的奉迎者に就いては、位置、順序を一般の奉拜者と區別し、警衞係員其の他と打合をした結果、七月二十七日左の通り決定した。

一、大村波止場で奉迎する者

官廳員・公吏・有位帶勳者・神官僧侶・在鄉軍人・父島分會員・赤十字社員・愛國婦人會員

二、大村役場前で奉迎する者

八十歳以上の高齡者

三、大村小學校校庭で奉迎する者

大村並に扇村袋澤村の小學校職員兒童・同青年訓練所生徒・同補習學校生徒・同青年團員

而して大村及扇村・袋澤村の兩世話掛にその旨を通達し、御當日早朝その位置に立札をすることゝした。

又一般奉拜者は道筋の片側又は空地に整列若くは下座せしめることに決した。

扇村から御上陸の時の各團體奉迎の方法は右に準據して、洲崎道路の入口廣場で奉迎するものとした。

（二）小學校

陛下行幸御內定の報に接して、直に各小學校長に通牒した。殊に御立寄在らせらるる大村と沖村に對しては、世話掛と打合せた上で、窓硝子等の破損箇所の入換其他修繕手入に着手せしめ、校舍校庭には清潔法を行ひ、二十九日に兒童成績品陳列場の準備は全く終へ、更に場內はソーダ水で數回に渉つて掃淨し、重ねて警視廳から出張した防疫醫が嚴重に消毒を行ふた。

兒童成績品陳列場は、表玄關に直面する第二・第三教室の二室（約四十坪）を充て場內には白布を張詰め、陳列の方法に就ては校長が主として之に當り、第三教室に大村、第二教室に扇浦各小學校の兒童成績品を陳列した。

大村・扇村・袋澤村の小學校兒童・補習學校生徒・青年訓練所生徒・青年團員は、大村小學校々庭に整列奉迎の爲め、二十七日・二十九日の二回、全員を校庭に集合せしめ、奉迎豫行練習を行なつた。三十日午前九時三十分　陛下御徒歩臨幸の節は「敬禮」の

合圖によつて、職員生徒兒童一同最敬禮をなし、奉迎申上げ、峰岸大村小學校長の御誘導で設けられた兒童成績品を御覽あつて(約十分)後、校長の御先導で校庭に設けられた壇上に上らせ給ふ、此の時知事は　陛下の御前に進み出でて最敬禮を行ひ、生徒・兒童・園員一同之に倣ふ。續いて知事は「天皇陛下萬歲」の發聲に次いで、一同が之に和し手に持つ小國旗を振つて　陛下の萬歲を三唱し奉り　陛下御降壇後再び校長の御誘導で一同奉送することゝなつた。

(三)　御休憩所

御休憩所は、支廳構內物產陳列館樓上と扇村連珠谷試驗林內とに設け、先づ陳列館樓上に於ての玉座の位置を定めた。天覽を仰ぐ獻上品陳列の場所と日東製氷株式會社の寄附する氷柱(花氷)並に盛花を備ふる位置を選定した上で、場內の手入掃除消毒等を屢次施行し、二十九日獻上品の搬入陳列を終つて最後に防疫醫(警視廳出張員)が消毒に從ひ、隈なく嚴重に施行した。

玉座の位置は、本館階段を上り、左側中央に二坪餘の絨氈を敷き、宮內省御差廻しの御用度品御机、並に御椅子を安置し、御机には鳳凰の卓子掛を蔽ひ、御座所の前面約二間の距離にある階上の入口には、金屏風を廻らし、又御座所前面の本館西側には　字形に机を配置し、白布で覆ひ獻上品の陳列に備へた。

連珠谷の御休憩所は、その淸流に沿ふた、平地で樹木が鬱蒼とした場所を選定し、附近の雜草を苅取つて、宮內省差廻しの御卓子及御椅子を備へ、稍距つた木蔭に御厠を設け、對岸の平地には小笠原營林署から獻上する鉢植を陳列し、更に約三十間を距てた木蔭に、飮料並に果物を容るゝ天幕を設けた。

(四)　徽　章

供奉員其の他行幸關係出張諸官廳員並に新聞記者等に對して支廳員なることを表示する爲め支廳員は蝶形の徽章を左胸部に附することとし、二十九日、之を廳員一同に交附(常傭人夫等には赤布腕章)した。

第二節　交通・通信

本島の常時に於ける交通は、橫濱を起點とする年十六回の定期航海と各離島間にには別に離島定期航海とがあつて連絡を保つてゐるが、今回　行幸の御沙汰を拜するに及び、奉迎の準備其他の爲めには到底前述の交通のみでは不備を免かれないので、爾來何時でも出動出來得る樣に發動機船を準備し置き、以て交通の圓滑を圖つた。又一面通信上に在つては、平常支障を來たす程度の不便はないけれども

行幸前後の通信は最も繁劇を加ふるので、遞信當局では、左記の通り、臨時擴張を行ひ、海軍無線電信所でも亦左の通り通信の便宜を與へられた。

海底線	平	常	午後	〇・三〇	時分
		同	同	六・三〇	ヨリ各三十分間
		同	同	一〇・三〇	
	臨時擴張	自七月三十日至八月二日	午前	八・〇〇	
			同	一〇・〇〇	
			午後	二・〇〇	ヨリ各三十分間
			同	四・〇〇	
			同	八・〇〇	
			同	一一・〇〇	
海軍無線電信		自七月二十日至八月二日	午前	五・〇〇	
			同	九・〇〇	
			午後	三・〇〇	
			同	七・〇〇	

備考　電報輻輳の際は前記の外に毎偶數時に於て父島、横須賀間の無線連絡あるものとす。

尙　行幸當日には各部署の連絡を計るため父島要塞司令部で次の通り電話を架設した。

大　村

小笠原支廳・父島要塞司令部・父島海軍無線電信所・小笠原島郵便局・小笠原島警察署・父島憲兵分駐所。

南陽館(行幸關係者宿舍)・宮内回漕店・二見館(行幸關係者宿舍)・父島測候所・清瀨埠頭事務所・大村小學校・父島要塞司令部臨時事務所・奥村通信所・大村埠頭通信所。

扇　村

小笠原島開拓記念碑所在地・連珠谷通信所・扇浦埠頭通信所。

第三節　衞生に關する事項

行幸御内定あらせらるると共に各村世話掛に清潔法の施行を嚴重勵行するよう通牒を發し、父島兩村には口頭で(母島には電話にて)懇談を爲し、施行後は、平素より一層嚴密な檢査を行ひ、傳染病の豫防方法並に注意書を各戸に配付し、殊に井戸・下水・溝渠・汚水溜等の浚渫修理等に就いては、當日支廳員・役場吏員・衞生委員・警察官吏が手分して檢査の任に當つた。

七月二十一日、警視廳の防疫醫並に防疫監吏と協力して、下水の消毒を施行し、又蠅の驅除に就いて宣傳し、其の驅除實行に全力を盡した。二十二日夜午後七時からは、大村小學校で衞生講話會を開催し、聽衆數百名に頗る感動を與へた。

次で二十三日・二十六日に渉つて、腸チフスの豫防注射を施行し、二十八日、再び各

戸井水の消毒及び家屋の内外、下水、溝渠、汚水溜其他の掃除を勵行せしめ、二十九日早朝から、前回と同樣に檢査を施行した。同日一般奉拜者救護所を大村海岸附近支廳水夫詰所の一部に設け、非常の救護に對する應急設備を爲し、村囑託醫が不在の爲め、警視廳の防疫醫が醫療の任に當つたが輕症者二名あるに過ぎなかつた。

三十日　陛下の御思召に依つて、父島及母島に御碇泊中、侍醫をして特に島民の診療を行はしめらるる旨の御沙汰に接したので、直に各村世話掛に通牒し、同時に大村及沖村の醫務所を清掃して診療に充てた。診療を受けた者は三十六名である。

第四節　功勞者調査

本島功勞者として調査したものは次の通りである。

自治功勞者	志村文次郎	
農事功勞者	青野正三郎	
自治功勞者	久世延吉	
社會敎化事業功勞者	デヨセフゴンザレス	
農事功勞者	堤德藏	

第五章　奉迎施設（下）

第一節　假棧橋の架設

東京府土木部の直營で、父島大村防波堤尖端を基點とし、東南方に向つて、長さ二十五間、幅二間の橋梁を架設し、更に長さ九間二分幅二間の浮棧橋を接續した。又父島扇村には、防波堤内方の階段を基點として、長さ五間の浮棧橋を設備し、母島沖村には、現に存する混凝土突堤に接續して、長さ十一間五分の橋梁と浮棧橋を架設した。

小笠原支廳では、清瀨の捕鯨事業場にある棧橋を修復した。

母島在鄉軍人分會は、南京屋敷の西方に當る、椰子濱海岸の渚に、長さ五間の急造棧橋を設け、御上陸に供へた。

大村棧橋の設計は、全棧橋中最も堂々としたもので、扇村のものは、函形の浮棧橋を結合し、沖村の分は、從來のコンクリート突堤に繼ぎ足したもので、御乘艇は棧橋の側面に繫留の設計とし、清瀨のは、從來捕鯨事業場で造つたものに、新しい杉板を並べ、尖端浮動の裝置であつた。沖村南京濱のものは、在鄉軍人分會一晝夜の作で、

海岸の岩礁上に板を並列し、波が打てば橋板上を超越する程の高さのもので、在郷軍人中工兵科出身者の考案設計に成り、他を假棧橋と云へば、之は急造棧橋又は模造棧橋とでも云ふものである。要するに五橋とも皆相異つた設計である。

第二節　綠蠟龜蓄養場及孵化場修復

周圍堤防馬踏の兩側、高さ約三寸の混凝土土留を設け、其の內部に細砂を盛つて平坦ならしめ、蓄養場內の堀鑿を行ひ、且産卵場周圍の木柵新調。

清瀨の龜卵孵化場は、金網を修理して清掃した。

第三節　鰐飼育場の修築

小笠原支廳構內の鰐飼育場は、柵の腐朽したものを改造し、鐵梁は塗換へ、且標本陳列場前からの降下道を、混凝土の階段に改造して、附近を清掃した。

この工事は總て小笠原支廳で施行した。

第四節　燈竿の建設

父島大村船溜防波堤の上に、燈竿建設の必要を認めて、小笠原島水產會は曩に所要經費の支出を決議し、準備を了つたけれども、其筋の認可を得ないで遷延したが

偶々假棧橋の架設に會つて臨時に點燈の緊切を感じ、假棧橋の基點、即ち防波堤の尖端に急設した。

第五節　網簗の設置

網簗は二見岩の南方に設置し、縱橫各八間、深さ約四間とした。簗內に放養した魚介類は左の通りである。

魚　類　梅色・鯰・シヨナクチ・アカバ・笹魚・目玉・タンゴ・四ツ針・オヂサン・ブダヒ・油鯛・鯛・カワハギ・カサゴ・縞鯛・縞鰺

甲殼類　龍蝦

介　類

第六節　覗　鏡

海中透視用の覗鏡には、特に把手を附けて取扱に便ならしめ、圓形大小各二箇、海中御寫眞用として、方形（縱一尺二寸・幅九寸・深さ九寸）のもの二箇を支廳で調製して御用に供した。

（附）　土木工事一覽表

大村道路修繕　延長四百三十間、幅三間
同　路面不用土取除　延長六十間、平均幅三尺、平均厚二寸
奥村道路修繕　延長五百五十間平均幅一間
扇村道路修繕　延長二百三十間、平均幅三間三尺
大村川掃除　延長五百間、平均幅一間二尺
大村排水溝掃除　延長二十二間、平均幅一尺
下水掃除　延長九十間、平均幅一尺
大村官有地先掃除　延長五十間、平均幅三尺
大村道路下水暗渠掃除　延長三十間、平均幅三尺
清瀬橋修繕　延長三間三尺、幅一間

第六章　海上奉迎送船

第一節　夜の海上奉迎

父島では七月三十一日、午後八時三十分、出動を開始し、各世話掛、在鄉軍人分會、青年團主催の下に、提燈を持つた奉迎者を發動機付漁船に、滿載

し、列を爲して御召艦山城の周圍を巡航し、萬歳を奉唱した。

第二節　カヌー船の奉送

七月三十一日午前八時、父島二見港御出港の際、父島在鄉軍人分會と青年團は、本島特有のカヌー船五十餘隻に、各々國旗を掲揚し、二列の隊形を取つて（發動機船五隻）分列式を行ひ、萬歳聲裡に御召艦供奉艦を奉送した。

第三節　最後の奉送

八月一日母島に於ては、村民が發動機船數隻に分乘し、御召艦近くに至つて萬歳を唱へ奉送した。

第七章　宿舍・接待

宿舍は、平素旅館等の設備が不完全のため、多數の旅客を收容することが不可能である狀況にあるので、最も意を注がなければならなかつた。乃ち諸般準備の爲め、先著した諸關係員と供奉員に充當する宿舍は、幾回の折衝を重ねた末に、左記の如く配置するに至つた。

宿舍表

官舍	南陽館	二見館	其他
東京府知事 平塚廣義（支廳長官舍）	內務省警保局長 山岡萬之助	警視廳警視 山內繼喜	技師 豐島厚（奧村歐次郎宅）
東京府屬 板倉聰一（同上）	東京地方裁判所長 今村恭太郎 外二名	警視廳警部 柳原順藏 外四十一名	第一師團參謀中佐 平山繁（渡邊三朝宅）
第一師團長 和田龜治（要塞司令官官舍）	警視廳警務部長 木島茂	防疫醫 柏木正章	少佐 熊野利助（同上）
宮內屬 河井十吉（支廳官舍）	內務事務官 宇都宮孝平	同 清水數雄	近衞師團參謀中佐 奧保夫 外尉官二名（軍艦）
東京府屬 加藤三郎（同上）	防疫官 飯村保三	防疫監吏 權田權三郎	
同 高瀨松吉（同上）	內務屬 關誠太郎	同 鈴木正夫	
同 平野綠（同上）	警衞隊長少佐 芽野正大	警視廳衞生技手 林富美三	
東京府土木技師 河合清（同上）	遞信局書記官 加藤惠義		
同 染谷庸	遞信局書記 林翼		
同 芥川凡夫	警視廳警部補 淺沼萬次郎		
警視廳警部補 大倉省三			
東京府道路技手 岡弦（同上）外五名			
檢事 棚町文四郎（裁判所官舍）外一名			
新聞記者團（要塞官舍）			
東京府農林技手 小山田一雄（支廳官舍）			

接待に關しては、供奉員の休憩所を支廳陳列館の北方に、横三間・縱四間の天幕にて造り、清涼飲料と果物を供へ、扇村連樹谷では、清涼飲料及果物を供ふ場所が連珠谷川に添ふた木蔭であるので、特に天幕を張設しなかつた。

新聞記者は全部父島では陸軍官舍に宿泊せしめ、陸軍で斡旋大に努められたが支廳員も時々訪問慰安して、名所並に撮影箇所等に就いて、說明且便宜を附與し、更に新聞記事材料の提供をした。母島に於ける宿舍は沖村世話掛猪子徹雄に依賴して各種の便宜を附與した。

行幸當日は、發動機船巡島丸（九噸）を支廳で傭上げ、記者團を隨時便乘せしめて奉

迎送並に大村、扇村間の往復に供し水陸通信の連絡上に便宜を與へた。

因みに各新聞社派遣員は次の通りである

記者	朝日新聞社	山本地榮
同	國民新聞社	千原文英
同	同	石島悌次郎
同	同	原翁
同	時事新報社	山田寛司
同	同	吉田豐巳
同	中外商業新報社	齋藤健次
同	東京日日新聞社	梅谷松太郎
同	同	福島龜吉
同	報知新聞社	鈴木憲一
同	讀賣新聞社	岡田彥七郎
同	萬朝報	山本照
畫報	佐藤雅盛	
同	帝國通信社	河口豪
同	畫報	北角玄二
同	相模中央	山本正二
同	朝日新聞社	山本地榮
同	同	佐々木信暲
同	國民新聞社	眞柄秋德
同	時事新聞社	柏木金太郎
同	太洋寫眞通信社	河本綾男
同	同	森川新一
同	中外商業新報社	齋藤健次
同	日本電報通信社	山中宏
同	報知新聞社	西村丁一
同	東京日日新聞社	監督 須田虎太郎
同	同	技師 瀧質
同	同	荒川勝彌

第八章　天覽品

第一節　標本目錄

一、木材及板類

貴重材製品

品名	員數
タマナ板	一
ヤマグス板	一
ローズウード板	一
センダン板	一
センダン板	一
タマナ板	一
桑床板	一
桑卓子板	一

品名	員數
桑	一
イチビ	一
タマナ	一
ピロー	一
桑丸	一
タマナ	一
イチビ	一
桑	一

品名	員數
角柱	一
角柱	一
角柱	一
廻縁	一
丸柱	一
床縁	一
落懸板	一
落懸板	一

品名	員數
桑	一
タマナ	一
ヤマグス	一
ピロー	一
タマナ	一
落懸	一
落懸	一
落懸	一

品名	員數
桑	一
タマナ	一
ヤマグス	一
ピロー	一
丸柱	一
落懸	一
落懸	一
床縁	一

主要林材木鑑

ウドノキ	ガジユマル
オガサハラガンピ	シロメゴム

オガサハラゴシユ	ウラジロエノキ
ボタイジユ	リウキウコクタン

テリハボク（タマナ）	
ヤロード	

ハスノハギリ	ムクロジ
シマシロダモ	オチヤノキ
ヒサカキ	クロヨナ
ハツバキ	ニンシヤリンバイ（アレキサンドル）
アデク（アカテツ）	シマイスノキ
オガサハラヤツデ	シマモチ
オガサハラハマボウ（イマアサ）（カイガンイチビ）	オガサハラクハ

ムニンイヌツゲ	ギンカウクワシ
シマボウ（モモタマナ）	モクタチバナ（コマイギ）
オカテツ（クロテツ）	シマコクサギ
モクマワウ（メリケンマツ）	シマムラサキ
シマムロ（ヒデ）	シマアオカウ
ピラウ	テリハボク（タマナ）
コヤシ	
アカウサンセウ	
インドゴムノキ	

サウシジユ	
センダン	
シマタイミンタチバナ	
シマモクセイ	
オガサハラボチヤウジ	
コヤシ	
オガサハラタコノキ	
ローズウード	

二、鑛物

新硫黄島噴物

品名	點數
浮石	一
溶岩	一

品名	點數
砂礫	一
山灰	一

品名	點數
小浮石	一

化石

品名	點數
Echinacyamus. Sp.	
Conus. Sp.	
Allveolina. Sp.	
Fusu. Sp.	

名	點數
Magilus. Sp. (巻貝)	
Maeandrina. Sp. (珊瑚)	
Schizuster Nummuliticum. Tokunaga. (貨幣石大形)	
Nummulite Javanus. (貨幣石小形)	
Nummulite Paguelensis. (齒)	
Lamna. (鮫)	
Fredina. Sp. ?	

岩石

品名	點數
硫黄石	一
赤石	一
青石	一
黒曜石	二
礫石凝灰岩	一
輝石安山岩	一
凝灰岩	五
石英安山岩	一
軟滿俺鑛	一
含銅硫化鐵鑛	一
珊瑚礁	一
無人岩質集塊岩	二
蛋白石	一
燧角	三
砂	一
石	一
硫化鐵鑛	一
鱗石	一
方解石	一
木炭	一
卷貝	二
長石	一
砂	一
宵	一
硫化鐵鑛	一
鱗石	一
砂	一
石	一
岩	一

雜

品名	點數
硫黄ノ湯	一
黄華花	一
長石土	一
石硫黄	一
鱗土	一
鑛壌	六

三、林投葉細工及團扇

品名	點數
林投葉カバン	三
林投葉文庫	二
バナナスリッパ	三
ピロー	三
林投葉團扇	三
林投葉手提	二
林投葉帽子	二
林投葉巻煙草入	四
林投葉土瓶敷	一

四、農事試驗場試製品

品名	點數
ロースウードタンニン	一
桑鋸屑タンニンエツキス	一
ユマイキタンニンエツキス	一
アレキサンドルタンニン	一
モモタマナ樹皮タンニンエツキス	一
印度ゴム粗製品	一
ユウカリー油	一
濱桐粗製品	一
樟腦油	一
植物油	一
封筒	四
半紙バナナ莖葉	一〇〇
半紙バナナ莖葉	五〇〇
印度ゴム剝取ゴム	一
レモン草油	一
アコウ油	一
オチヤ油	一
粗製樟腦	一
織維植物	八
半紙バナナ莖葉	五〇〇
半紙印度ゴム樹皮	五〇〇
卷紙	一〇〇
椿ママキ皮	六〇〇
半紙レモン草	四〇〇

五、木製品

品名	點數	品名	點數	品名	點數
タマナ花臺	二	ピロー硯箱	一	狀差	一
椰子實花押	一	桑煙草入	一	イチビ丸煙草盆	一
タマナ丸火鉢	五	桑煙草盆	二	イチビ菓子器	一
桑鏡臺	一	桑丸菓子器	二	ピロー急須臺	一
ピロー丸火鉢	一	イチビ角菓子盆	一	桑釦入	一
イチビ丸火鉢	四	桑丸盆	九	イチビ花臺	一
センダン丸鉢	一	イチビ角盆	一	ピローステッキ	二
桑角盆	四	桑花臺	一	トウカラシステッキ	二
寫眞鋏	一	桑菓子器	一	野椰子葉鞘花押	一
桑カラー入	一	イチビ碁器	一	桑煙草入	一
桑碁器	一	ヘゴ花立	一	桑ステッキ	二
桑茶筒	一	タコ筆立	三	ヒデステッキ	二
丸八花立	二	桑硯箱	一	アレキサンドルステッキ	二
丸八筆立	一	ピロー煙草入	一		

六、鳥類剝製及獸皮

品名	點數	品名	點數	品名	點數
カツチトリ大、中、小	六	マミジロクキナ(ギッチョン)	一	ヒヨドリ	三
オガサハラカラスバト	二	チドリ(ムナクロ)	二	カツチ鳥ノ雛	五
タカ	二	ボウスン	一	鹿ノ角	一
メジロ	一	白鳥	一	カモメ	一
ウグヒス	一	サギ	一	ミミヅク	三
イスカ	二	大コウモリ	二	鹿雌雄	二
マメマワシ	一	ネヅミ	一	山羊ノ皮	二
信天翁	三	鹿ノ皮	三	山羊ノ角	二

七、農產物

蔬菜及果實

品名	點數	品名	點數	品名	點數
馬鈴薯	一	ゴード	一	黃蕃柘榴	一
キダチトーガラシ	一	木耳	一	サイナムチエリー	一
トマト	一	大豆(枝豆)	一	無花果	一
ホーズキ	一	オクラ	二	蕃柘榴	一
野生トマト	一	パンノ實	一	ホトー	一
里芋	一	アノナ	一	甘藷	一
食用シヤボテン	一	パインアツプル	三	ヤーム	一
胡瓜	一	パインアツプル(スムス)	一	パパヤ	一
花百合球根	一	パインアツプル(スムス新種)	二	ホトー	一
菜豆	一	パインアツプル(在來)	二	ワシントンネーブル	一

品名	點數	品名	點數	品名	點數
ナツメヤシ	二	蕃荔枝	一	レモン(ゼノア)	二
ソテツ雄花	一	枇杷	一	ヤシノ實	一
小笠原オレンヂ	一三	タツカー	一	乾生姜	一
佛國オレンヂ	一	桃	一	玉蜀黍	二
夏柑橙	一	玉蜀黍(粉末)	一	粟	一
濠洲桃	一	パインアツプル瓶詰	一	小豆	一
プシジユームカトリヤナム	一	アロールート澱粉	一	文旦	二
栗	一	バナナノ實	一	オレンヂ象皮病	一

特用農產物

品名	點數	品名	點數	品名	點數
甘蔗	一	打綿	一	白下糖	二
實綿	一	繭	一	プシジユームジヤム	一
コカ乾葉	一	コカ乾葉(粉末)	一	コーヒーノ實	一
藍靛	一	バター	一		

果樹及林木の花・實

品名	點數	品名	點數	品名	點數
ホトーノ花	一	クラリンドウノ花	一	アサヒヱビネ	一
石栗ノ花	一	カリカクオーシホリア	一	メリケン松ノ實	一
ツルタコノ花	一	ロースウードノ花	一	タコノ實ノ仁	一
シヤボテン花	一	タマナノ花	一	ガジマル	一
パツシヨンフルート花	一	アツプルウード	一	ヤロードノ實	一
濱桐花	一	アレキサンドル花	一	ウコンノ實	一
コーヒー花	一	ツバクサノ花	一	ヤマガキ	一
ヤマタバコノ花	一	ウドノ花	一	大葉ゴム	一
タコノ花	一	ソーカノ花	一	タコツルノ實	一

林木ノ種實

品名	點數	品名	點數	品名	點數
ハマギリ	一	フヂノミ	一	テンノウメ	一
ホウノツラ	一	シロテツ	一	モクレンヂ	一
パラゴム	一	ビーデビーデ	一	アカテツ	一
クチナシ	一	カミソリグサ	一	シロメゴム	一
アノナ	一	コバノゴム	一	パパヤ	一
アツプルウード	一	ヤロード	一	シマトベラ	一
バラ	一	タバコ	一	アカウ	一
カハガンタバコ	一	クロテツ	一	ロースウード	一
イチビ	一	イソフヂ	一	シマアワブキ	一

品名	點數
モクセイ	一
チーキ	一
カイガンイチビアカテツノオバサン	一
	一

製紙原料及バルフ

品名	點數
印度ゴム樹皮	二
パインアツプル	一
ソタクサ	二
アカーブ	二
マキ	二
カミソリクサ	二
バナナ葉	二
サクラガンピ	二
バナナ莖	二
アローツート	二
エピラン	二
カハヤナギ	二
ソーダ	二
甘蔗搾骨	二

植物油及タンニン原料

品名	點數
アカウ葉	一
ヒテ葉	一
ユウカリ葉	一
コカ葉	一
クス	
アレキサンドル樹皮	一
タマナ實	一
ミリスチカフラグラン實	一

植物纖維及加工品

品名	點數
タコ根ノ纖維	一
イチビ纖維	一
ピロー毛	一
龍舌蘭	一
タコ葉	一
丈草履	一
サイサル纖維	一
菅草履	一
繩	
太、中、細	三

八、旗竿及砲彈

品名	點數
旗竿	一
砲彈	一

九、寫眞

品名	點數
桑ノ大樹ニ羊齒類ノ着生	一
小笠原島普通林相	一
桑ノ大木	一
母島森林ニ於ケル棟ノ大樹	一
ピロー樹ノ群生	一
タコノ木ノ純林	一
マンゴー園	一
パパヤ	一
パナナ園	一
硫黄島森林ニ於ケルタマナノ大樹	一
エノキノ大木	一
羊齒林	一

一〇、南洋群島參考品

品名	點數	品名	點數	品名	點數
甘蔗	一	アカテツ	一	タマナ樹林	一
ピロー樹林	一	農地防風林	一		

品名	點數	品名	點數	品名	點數
木彫人形	一	漁網ノ浮子	一	鋤	一
カンガール皮	一	シタン材幹	一	箭	四
椰子實柄杓	二	椰子樹材幹	一	イプリノ木	二
牛車模型	一	タコノ木材幹	一	木製ヘラ	二

以上通計五百六十四點。

第二節　標本解說

旗竿及砲彈　旗竿は、父島産イチビ材で、嘉永六年(西紀一八五三年)六月米國水師提督ペルリが來島の際、旗竿用杭として、父島扇村振分山の頂上に建設し、明治四十二年二月迄五十六年間存立したものである。又砲彈は安政元年(一八五四年)ペルリが江戸灣に在つて、別將アボットをマセトニヤン號で本島に派遣し、二見港碇泊の際、大砲射撃を試みたものを、大村字奥村で拾取した。

鹿　本島森林動物中最大なもので、ペルリが本島に航行の際放つたものであると云ふ。開拓の當時は、父島列島殊に弟島に多く棲息して、農作物を害することが甚だ多かつたが、人口の增加に從つて獵殺せられ現今では大に其數を減じ、父島東南の一部僻地に若干生存するに過ぎない。

山羊　同じくペルリが放つたのを祖とし、元來三種あつたが、現今は雜殖して舊來の形態を備ふるものはない。

第三節　說明

一、地質及岩石　小笠原島は全く其時代を異にした二種の火山線で、小笠原群島は第三紀始新統時代の舊火山から成り、硫黄列島は、第四紀の新火山から成り、鳥島は珊瑚礁から成つてゐる。

小笠原群島は、富士火山帶と其の趣を異し、古くエヲシーン時代に噴出して、ミヲシーン期に達しない內に鎭火した數箇の海底火山から成つてゐる。父島・母島・聟島の三列島は、岩石の狀態と地質の構造が全く同一で、安山岩の一種である無人岩を以て構成せられ、其の多くの部分は、水成の集塊岩・凝灰岩から成り、父島旭

山の如きは、九百尺の山頂に至る迄、集塊岩から成つてゐる。母島で有名な貨幣石、鮫の歯其他介化石を含有する凝灰岩は、今や海抜數十丈の上にある。又母島石門山、父島南崎には、珊瑚礁質石灰岩が多く、諸種の介化石を含み、殊に石門山の如きは、漸次隆起し數級の段階を成して、八百尺内外の高所にも、尚珊瑚礁が存在する。是れは明に火山鎮定の後、隆起によつてなつたことを證する。

硫黄島は第四紀に屬する新期の火山線で、四圍の海中には海底火山があり、海水が噴騰するところ多く、島には餘燃未だ熄まず、地熱の高い箇所が少くない。又諸所に硫氣孔を存して、盛に瓦斯を噴出し硫黄を産する。全島は黄色の凝灰岩と砂質黝色の火山灰層熔岩とより成つて、段階的に所々に歴然とした斷崖を存し、海蝕を受けた種々の形跡があり、枝珊瑚は處々の凝灰岩上に樹立して、地盤の隆起が甚だ新しいのを證する。

南北の硫黄島は、圓錐形で、海中に屹立し、海抜千五百尺以上の高さを有する。

二、新硫黄島噴出物　大正三年一月、南硫黄島の東北三浬の地點に噴火が起つて、一新島を現出した。新島の高さは、長徑〇・七浬、短徑〇・五浬の擬楕圓形で、高さ三百九十尺餘あり、噴出後一年八箇月で其の姿消失した。

三、有用鑛物　本島には含銅硫化鐵鑛、硫化鐵、滿俺鑛、硫黄等諸所に産するが其量は極めて少い。

硫黄は硫黄島の摺鉢山と元山に産する、明治二十二年頃から採掘に着手し、爾來産額に消長はあつたが、明治三十七年頃から採掘を中止した。

四、硫黄島産三角石　硫黄島の中央である字元山と、南端摺鉢山との中間を、千鳥ヶ原と稱し、火山の噴出物である小火山礫より成り、沙漠の狀態をなしてゐる。此の砂礫上に存する溶岩、凝灰岩等の破片は、氣候風による飛砂のために、表面が磨削せられて、恰も三角形をなす。

五、農作物　（甘蔗）本島の氣候風土に良く適合し往時は宅地附近に栽植するに過ぎなかつたが、明治二十一年頃から製糖の原料として栽培せらるゝに至り、爾來逐年旺盛となつて、今や其作付反別一千餘町歩に達し、年々四千萬斤内外の蔗莖を産出するに至つた。本島に在つては最も重要な作物で、栽培法は漸次改良せられ、現今その品種が六十有餘ある。

（砂糖）本島の製糖は、主として白下糖・赤玉糖で、其の製造高は四百萬斤内外である。近時糖價が暴落しても、其價額年々六十萬圓内外で、農産物の首位にある。

製造法等も大に進歩し優良品を産するに至り、又壓搾器の如きも、石油發動機を原動力とする横轉式壓搾器を施設するものが漸く增加し、壓搾能率の增進を計つて居り、製造に從事するものが三百五十戶、人員一千六百餘人で、總人口の約四〇%を占むる。

（蔬菜）本島の氣候は四時溫暖で、周年蔬菜の栽培に適し、自家用に供すのみでなく、冬期に産する南瓜・冬瓜・トマト・莢菜豆・茄子・胡瓜等は不時の蔬菜として需要が多く、栽培は逐年盛大に赴き、近年にあつては京濱・大阪地方に移出する額貳萬圓餘に達する。

（果實）本島には、ババヤ・マンゴー・バナナ等の熱帶果實とオレンジ・文旦等の柑橘類が能く成育する。バナナ・ババヤ・マンゴー等は熱帶果實として都人士に珍重せらるゝに至り、其需要が益々增加してゐるのである。柑橘類の、文旦・小笠原オレンジは、外觀美麗で芳香美味なるを以て、京濱市場では、柑橘類の女王として歡迎せられてゐる。

昭和元年度の栽培樹數收穫高と價格を示せば左の如くである。

品種	樹數	收穫高	價額
マンゴー	三七二本	二、六四八貫	二、四七八円
パパヤ	一、五九九反	四、八三八	一、八〇八
バナナ	二三五木	二五、三七八	九、九二二
小笠原オレンジ	三三八本	四、〇三五	三、四〇五
文旦	九七本	一、七二五	一、四〇六

（材木及加工品）本島の森林にはクワ・イチビ・タマナ・センダン・ビロー・タコの木・ヤロード・ロースロード・アカテツ等の林木多數に成育し、就中クワ・イチビ・タマナ・センダン等は、材質が堅牢で耐久力が强いので、建築材料に適し、木理美麗光澤に富み、裝飾用材及細工物として賞用せられる。是等の貴重材で製作した細工物、即ち桑盆・イチビ煙草盆・タマナ火鉢・卓子等は、單に島内のみでなく、土産品としての需要が少なくなかつたが、今は原料が漸く不足を來し、往時の如く盛に製作しない。

（試製品）本島の野生植物と工藝植物の種實樹皮には、植物油タンニン分を含有するものがあり、又有用繊維を採集するに適するものが多いので、本島の農事試驗場は植物油・タンニン・紙等を試製し又繊維織物も、是等の利用狀況を調査するの爲に製作してゐる。

（繊維植物）本島には繊維植物が多數あるが、現今最も利用せらるゝのは菅草・タコ葉・サイサル・マニラ等である。就中菅草は菅繩として最も廣く利用せらる。タコ葉は編物の外に、草履製作に用ひらる。サイサル・龍舌蘭の繊維は、製網用に供せらるゝが産額は多くない。

（林投葉編物）先住者が手提を所持するのを見て、故人永島辰次郎が、編方及晒方を研究して製出したものである。明治二十二年、島廳（現在の支廳）で之れが製造試驗をなし、又希望者を募つて編方を傳習した結果技術が大に進歩した。爾來原料の漂白方法、編方等が種々研究せられ、又手提カバンが外國に輸出するに至つてからは、家庭工業として大に改良進歩した。

昭和元年度の産出高は左の如くである。

品名	製造箇數	價額
林投葉編物	六、三一六本	四、七七一円
蒲葵團扇	一、六五〇	二四八

（特用農産物）コーヒー・サイサル・コカ・魚藤・アロールート・ゴム等の飲料繊維藥用

澱粉の作物等は何れも試驗中に屬する。

六、鳥類　其の他剝製　本島に産する鳥類は極めて少數で、鳩、鶯、メジロ、メグロ、ルリ、カツヲ鳥等は其の主なるものである、又稀に珍鳥の渡來することがある。信天翁（アホウドリ）は早春聟島・西の島に飛來し、二月頃産卵して、雛を育て六月頃に飛び去る。鳥毛は布團等を作るに適するので、濫獲した結果、渡來數僅少となり、大正十五年四月、聟島列島中北の島一圓を禁獵區とし、同鳥の蕃殖を保護してゐる。小笠原大蝙蝠の體長は八寸餘、兩翼を展す時は三尺餘に及ぶものがある。往時は全島到る處に棲息し、バナナ・果實等を食害することが甚だしかつたので盛に捕殺せられ目下漸く少數となつた。マミジロクイナ（方言ギッチョン）は、硫黄島に産する珍鳥であつたが殆ど絶種となつた。

第四節　標本陳列館水産部

ヒメジ科　ヲヂサン

アヂ科　ムロアヂ・ヒラアヂ・カメアヂ・イトヒキアヂ・サメクサ・カツ

ボレ

サバ科　カツヲ・ソウダカツヲ・キワダマグロ・イソマグロ・サワラ・イ

サンマ科　ソサワラ・コケサワラ・ウメイロ・カツヲの卵
トビウヲ科　トビウヲ
コバンサメ科　コバンサメ
ボラ科　ボラ・イナ
カマス科　カマス
タイ科　タイ・マダイ・チイーキ・メダマ・アブラダイ・シヨナクチ
テングダイ科　タバコイレ
カサゴ科　カサゴ・イシヲコゼ・ハナヲコゼ・アカバ・タンゴ
ハギ科　カワハギ
カレイ科　ヒラメ
ホウボウ科　ホシセミホウボウ
エイ科　エイ
アンコウ科　アンコウ
ウナギ科　ウナギ・ウツボ・ジヤウナギ
ハゼ科　トビハゼ

ヨウジウヲ科　タツのヲトシゴ
フグ科　バラフグ・フグの異屬
ニシン科　コケライワシ・ホンイワシ・ヲグロイワシ・フタクチイワシ、トウゴロイワシ・ホンイワシ
ネコサメ科　ネコサメ
シロサメ科　サメの胎兒
ネヅミサメ科　サメの双兒
カンダイ科　ベラ・エイヅウ・カチヨウ・クマノミ
グチ科　グチ
イサキ科　チギ
スヽキ科　イス・メンチギ
ツバメコノシロ科　アゴナシ
イセエビ科　イセエビ・アシナガエビ・イセエビ異屬
クルマエビ科　カワエビ
ヤドカリ科　ヤドカリ

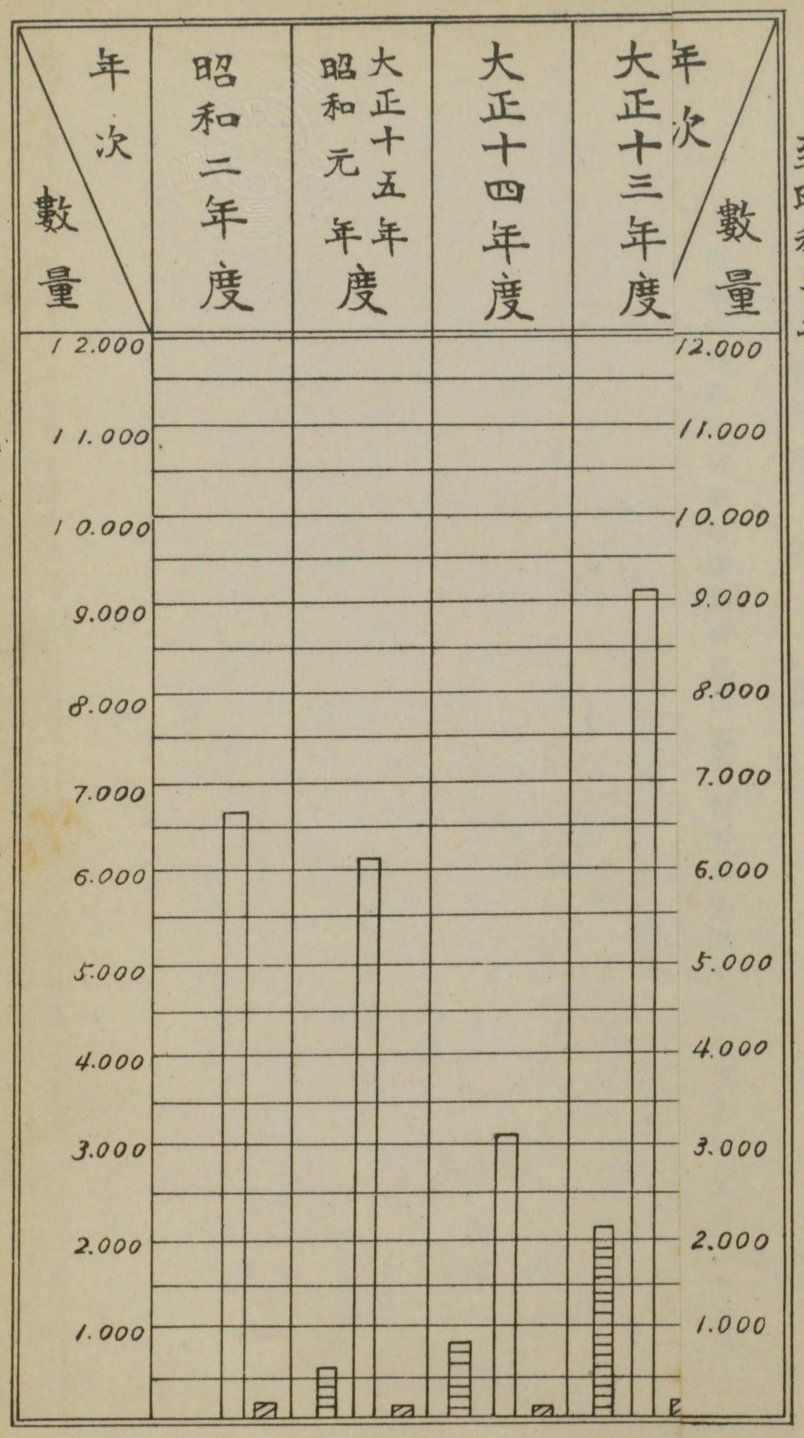
ガザミ科　ガザミ
ヅガニ科　モクヅウガニ
甲殻類　イシガニ
タコ科　タコ
マイカ科　マイカ
ヤリイカ科　アヲリイカ
カキ科　カキ
サバヱ科　ツノナシサバヱ
シャコ科　シャコ
ホラガヒ科　ホラガヒ
ハテイラ科　ヒロセガヒ
タコノコガヒ科　タコノコガヒ
タカラガヒ科　小笠原子安貝・ウミウサギガヒ
ヨメカサガヒ科　ヨメカサ
ソデガヒ科　クモガヒ・スイジガヒ

ウニ科　ウニ・ホンウニ・クモヒトデ
ナマコ科　ナマコ
サンゴ科　桃色珊瑚、白色珊瑚、紅色珊瑚、味噌珊瑚、木賊珊瑚、ハマサンゴ・シヤボテンイシ・ミドリイシ・キクメイシ・クサビライシ・
ウミマツ科　イホヤギ・イソハナ・ウミシバ・ウミマツ
ビゼンクラゲ科　クラゲ

第五節　綠蠵龜蕃殖狀況

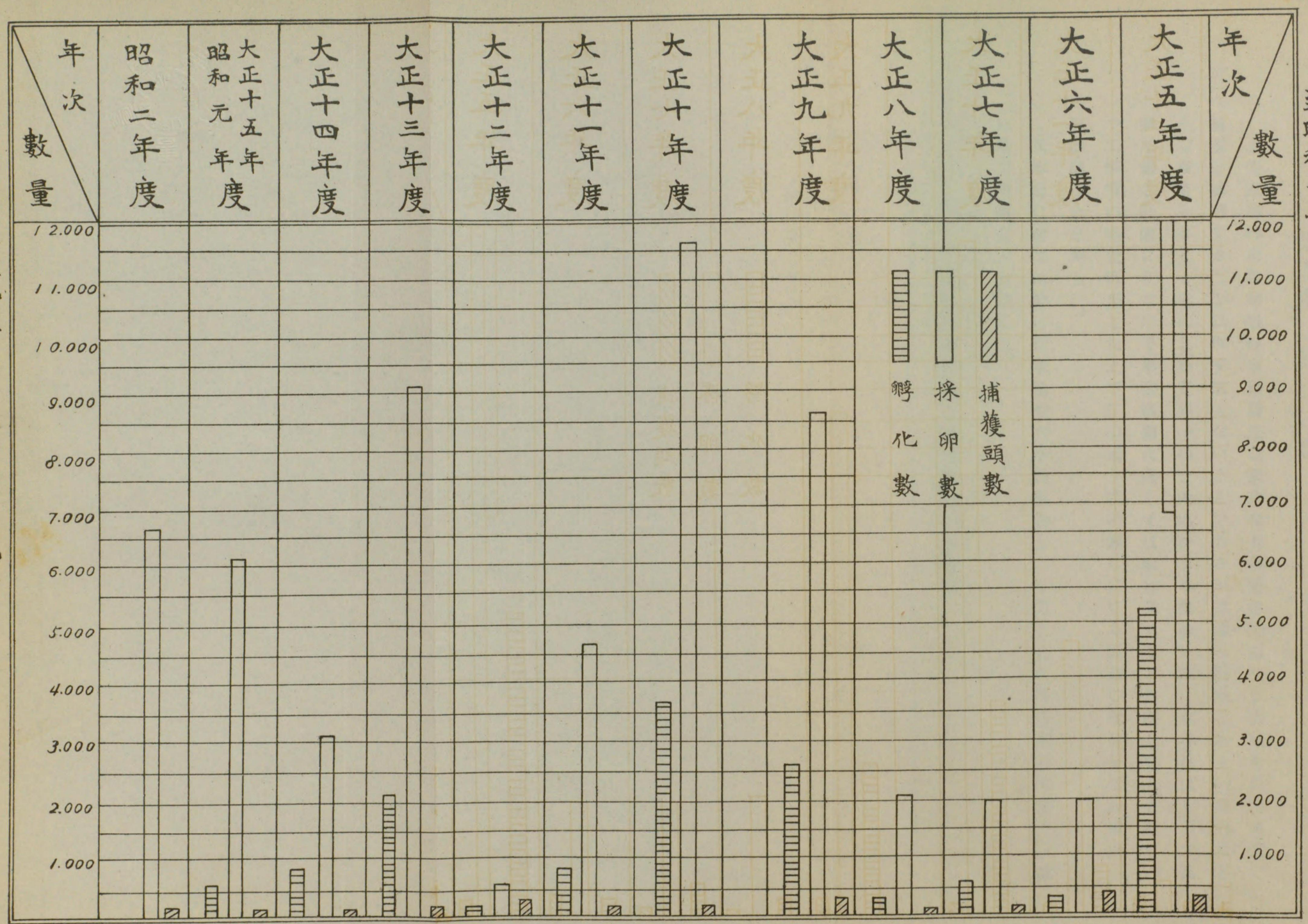
小笠原島の水產經營事業として施行する綠蠵龜の蕃殖狀況は、次に示す統計の通りである。

自大正五年至昭和二年 綠蠵龜捕獲頭數及採卵並孵化數



備考 昭和二年度ノ孵化數ハ未ダ孵化期ニ至ラズ記入セズ

自大正五年至昭和二年 綠蠵龜捕獲頭數及採卵並孵化數



備考 昭和二年度ノ孵化數ハ未ダ孵化期ニ至ラズ記入セズ

第九章　經　費

小笠原島行幸の御事は、本島發見以來未曾有の盛事であつて、赤誠を以て奉迎の誠意を披瀝することは申す迄もないことであるが、遠隔の僻地であり、一般内地とその事情を著しく異にし、物資の一切を内地からの供給に俟たなければならず、萬事不備の狀態に在るので、奉迎準備に關しては殊に深甚なる考慮を要し、各般に渉つて愼重に考査研究した上で、左の通り、諸準備に要する經費の配付を受け奉迎上、萬遺漏なきを期した。

又本府に於ては、特に行幸諸費六千圓を計上して、主として、各棧橋の設備其の他に於て遺憾なきを期した。

昭和二年度歳出經常部行幸啓諸費

款	項	目	節	金額	備考
地方廳	行幸啓諸費			八、六七五、〇〇〇	

款	項	目	節	金額	備考
		廳費			
			備品費	三、五〇一円〇〇〇	
			圖書及印刷費	一、六五〇〇〇〇	
			筆紙墨文具	四五〇〇〇〇	
			消耗品	二二〇〇〇〇	
			通信運搬費	五六一〇〇〇	
			傭人料	六二〇〇〇〇	
			雜費	二、六七〇〇〇	
		內國旅費		一、六一四〇〇〇	本府 五九二・〇〇〇 支廳 一、〇二二・〇〇〇
		雜給及雜費		三、五六〇〇〇〇	
			傭人料	八九〇〇〇〇	
			雜費	二、六七〇〇〇	

第十章　準備過程

昭和二年七月一日　午後八時、知事から支廳長に、左の至急電報が到着す。

本月末　天皇陛下、軍艦にて小笠原島に御寄港あらせらるる御模樣に拜聞す、打合の爲、二日の船便にて直ぐ上京せよ、直返。

二日　硫黄島出張中の支廳長から返電があつたので左の通、知事宛打電す。

五日、出帆豫定の定期船にて立つ。

四日　支廳長歸廳。

五日　支廳長壬生屬を隨へ定期船芝栄丸にて出京す。

六日　行幸御內定に關し支廳長は、赤誠を披瀝し御奉迎申上げ、尙村內一般に清潔法を施行し萬遺漏なきを期する樣、各村世話掛に通牒を發し母島へは電話を以て其の旨通達す。

七日　奉迎諸準備に關し聯絡打合の爲、各官公署其の他の代表者に對して打合會開催の通知をなす。

熱帶植物試育場の花壇及庭園木の手入、生垣の刈込みを爲す。

接待用のバヾヤを製氷會社へ冷藏方委託する。

八日　午前九時左の者集合し支廳物產陳列館樓上で協議打合會を開く。

支廳　村井第一課長、加藤水產課長、大道第二課長、吉原屬。

營林署　豐島署長。

要塞司令部　安達司令官、小林副官、松尾工兵部員。
海軍無線電信所　田島所長。
憲兵分駐所　小峯所長。
警察署　平山署長。
郵便局　寺西局長代理。
測候所　清水所長。
東京區裁判所出張所　稻垣書記。
在鄉軍人分會　伴分會長。
小學校長、青年訓練所主事、補習學校長、青年團長、峯岸總五郎。

協議事項

一、波止場浚渫の件、二、棧橋設備の件　三、道路補修の件、四、下水溝渠汚水溜掃除の件、五、河川浚渫の件、六、海岸及防風林淨掃の件、七、空地雜草除去の件、八、漁船整理の件、九、清潔法施行の件、一〇、道路砂散布の件、一一、關係官廳連絡の件、一二、奉迎送方法整理の件、一三、御野立所設備の件、一四、御警衛方法の件、一五、人夫供給方の件、一六、衞生情態調査の件、一七、宿舍に關する件。

午後一時から支廳員で、更に右協議事項に就いて協議を遂げ、夫々準備に着手する。

十　日　物產陳列館を手入する。

十一　日　支廳長から、父・母島共御上陸の御豫定（北村を除く）御立寄御豫定地、支廳、司令部、小學校、開拓碑、ロース石山其の他の見込成る可く費を省き奉迎の意を披瀝する樣各村に通牒せよ」との電報に接す。各關係村世話掛に通牒を發す。

十二　日　宿舍の手配準備に關し、當業者と打合をなす。

十三　日　大村管內の淸潔法を施行する。
小學校兒童成績品陳列の準備及成績品作製方を通牒す。

十四　日　二見港防波堤內及棧橋設置豫定地附近の浚渫工事に着手（七月二十八日竣功す）。

御警衛打合會が警察署で開催せられ、村井第一課長が出席す。

十五日　大村川排水溝の修繕、大村道路の修繕を行なつた。
十六日　十八日に各官公署諸準備の經過打合會を開催する通知を發す。
十七日　支廳の標本園と熱帶植物試育場の各植物に附する名札を準備する。
十八日　午前九時から陳列館樓上で準備經過打合會を開く。
十九日　芝罘丸で支廳長が歸廳し、同時に東京から準備の爲めに左記官公吏員が出張される。
内務省　宇都宮事務官・飯村防疫官・關屬。
東京府　河合土木技師・加藤屬・高瀬屬・平野屬・小山田農林技手・岡本、外山、鹿野各道路技手・森田工手・飯見、中野兩土木工手。
警視廳　山内監察官・柏木防疫醫・清水防疫醫並防疫監吏二名。
陸　軍　熊野參謀・茅野憲兵少佐外下士二名。
二十日　奥村に於ける献上品及接待用の果物狀況を調査す。
午前九時陳列館で第三次協議打合會を開き、支廳長が上京中に於ける打合會協議事項の報告及更に準備に關し各官廳聯絡打合を爲し、遺漏なき樣努めた。
一、支廳長報告、二、奉迎送の方法に關する件、三、御警衞方法に關する件、四、衞生に關する件、五、船舶に關する件、六、蠅の驅除に關する件、七、道路盛砂に關する件、八、寫眞班に關する件、
（行幸關係出張員も列席された）。
二十一日　午後一時から塚本扇浦峯岸大村各小學校長並に大村・扇村袋澤村・沖村・北村の世話掛を集め協議打合會を開く。
二十三日　行幸準備に關する規定を制定し儀式掛・庶務掛・献上品掛・工事掛・用度掛・接待掛を置いた。
廳員の分擔事項に就いて支廳長から訓示がある。
第四次協議打合會を開く。
第二課で献上品に關する打合會をなす。
二十四日　清瀬の假棧橋工事と清瀬奥村間の道路修繕工事に着手（二十六日竣工）した。
最後の協議打合會を開催する。

二十五日　母島に於ける奉迎諸準備打合の爲、支廳長は井上技手を隨へ加藤、高瀬兩府屬と共に海幸丸に便乘して同島へ出張す。

二十六日　献上用接待用果實を試育場に搬入する。

二十七日　支廳長其の他母島から歸廳す。

大村小學校々庭に於て、兒童職員(扇浦小學校も含む)の奉迎準備に關する方法に付實施豫行練習をなす。

二十八日　支廳員の諸準備經過報告打合をなし支廳長から訓示說明がある。

献上品を消毒する。

物産陳列館内に御座所献上品陳列所を設置する。

二十九日　各所の手入は萬端整理を了る。

午前六時供奉艦春日が豫定の通り二見港に入港し、平塚知事、今村東京地方裁判所長、山岡内務省警保局長、木島警視廳警務部長、加藤東京遞信局書記官、和田第一師團長、棚町東京地方裁判所檢事、河井宮内屬外新聞記者等十數名が到着さる。

支廳員、小學校兒童職員其他官公吏は大村埠頭に參集出迎をなす。

軍艦入港と同時に支廳長は登艦知事其他と打合せをする。

八時三十分一同上陸し、知事は支廳長の案内で假校橋小學校其他を視察し來廳され協議打合を行ふ。十一時三十分から大村小學校に奉迎豫行練習をなし、次に農事試驗場を檢分して御座所に充てらるる物産陳列館其他を嚴重に檢分さる。午後一時から大村の清瀬、奥村と扇村方面を視察し、更に献上品の下檢分をなし、廳員一同は徹宵準備全く整ひ權田防疫監吏最後の消毒施行する。

行幸の御日程並に供奉員人名表及御道筋圖面を印刷して配付す。

第二篇　正記

第一章　行幸第一日

第一節　父島御入泊

昭和二年七月三十日、千載の一遇　聖上陛下の行幸を迎へ奉り、開島以來未だ曾て有らざる無上の光榮に浴するけふの佳き日に、天氣は晴朗で、海波揚がらず、頃來珍らしく平穩であるのは、聖代の瑞祥として祝し奉るものであつた。

午前六時、高橋支廳長は廳舍内外の準備整頓せるを視た上で、平塚知事に隨ひ、更に一巡の後、小學校に於ける兒童成績品陳列の模樣並に奉迎準備を視、了つて沿道の施設其の他を檢して、大村埠頭に出で御上陸を御待受け申上げた。

午前八時、御豫定の如く、御召艦戰艦山城は、供奉の羽風・太刀風・帆風・秋風の四驅逐艦を隨へ、威風堂々、二見港内に御入泊があつた。御先着の一等海防艦春日からは皇禮砲殷々として海上に轟き、御召艦上からは嘹喨とした海軍々樂隊の吹奏が手に取る如く、滿艦飾の壯觀は目も眩ゆく拜せられた。知事を始め、山岡警保局長・木

島警務部長・今村東京地方裁判所長・加藤遞信書記官・飯村防疫官・棚橋檢事・河井宮内屬並支廳長は、直ちに伺候の爲、千鳥に便乘し、午前八時三十分、御召艦投錨位置の安定を見て、和田第一師團長・安達要塞司令官・茅野憲兵少佐が同乘した濱風及び春日艦長のランチと相前後して、御召艦の左舷から上艦した。

支廳長は甲板に於て、供奉の奈良侍從武官長・行幸主務官木下侍從兼宮内書記官御用掛服部博士・土屋侍從・矢野侍從武官・横溝内閣書記官等と、事務打合せを爲してゐた時、特に拜謁を賜はる旨の御沙汰を承はり、供奉長官關屋宮内次官・珍田侍從長待立の下に、單獨賜謁の恩命を辱うして、天顏に咫尺し奉るの光榮に浴したのは、ひとり支廳長の名譽なるのみでなく、蓋し全島民一般に蒙つた破格の天恩と申す外ない次第であつた。

かくて支廳長は諸般準備の爲、宮内官・近衞將校數名と共に、千鳥にて引返し、大村埠頭に先着して棧橋の袂で御待受申上げた。埠頭には各官廳吏員・各村役場員・帶勳者・神官・僧侶・各村總代・在鄉軍人分會員・赤十字社員・愛國婦人會員等が參集したのを始めとし、沿道空地には豫め警備掛で定めた場所に、一般奉迎者が(高齡者は大村役場前に)整列若くは下座して夫々御上陸を待ち奉つた。

第二節　御上陸

やがて午前九時十五分、山城及び春日の兩艦から發せらるゝ二十一發の皇禮砲が響き亘れる裡に　聖上陸下には、純白の海軍通常服を召し、大勳位章を佩はせられ、天皇旗を揭揚した御召艇で春日の艦載水雷艇御誘導のまゝに、めでたく大村假棧橋に御着陸あらせられ、天機殊の外御麗はしく、本島に於ける第一歩を印したま嚴の氣、全島に漲れる中を、奉迎員の最敬禮に對して、畏くも一々御會釋を賜ひつゝふ。森玉歩を進ませられ、先づ大村小學校へ向はせたまふ。

第三節　大村尋常高等小學校

大村小學校では、諒闇中すべて華美な裝飾等は一切御遠慮申上げ、唯黑布を施した大國旗を門柱に取附け、校庭の一隅には、在鄉軍人分會の假設電話隊が刻々活動し、本校兒童を始め、同訓練所・水產補習學校生徒・青年團員並に扇浦・袋澤小學校兒童・同青年團員等約七百名が各校旗、團旗を先頭に、二列側面縱隊の隊形を取つて整列し、重田首席訓導その指揮に當つた。

やがて「南陽館前御通過」の通報があると共に、一同「右向け」の姿勢を正し、道路に面して奉迎の隊形を取つた。　聖上陸下には、矢野侍從武官の御前行で、御徒步御臨幸

遊ばさる。御後には珍田侍從長・關屋宮內次官・西園寺御用掛・土屋・廿露寺・木下の各侍從・服部御用掛・山下軍事參議官・安保横須賀鎭守府司令長官及び知事・支廳長が御供して一同最敬禮の裡に、峯岸校長が御誘導申上ぐれば　陛下には畏くも擧手の御答禮を賜ひつゝ、表玄關に進ませられ、兒童成績品陳列所に成らせたまふ。

陳列所は舊校舍第二・第三教室をこれに充て、第三教室には本校兒童、第二教室には扇浦小學校兒童の成績品を陳じたが、各尋常科第二學年生以上の書方・圖畫・綴方各五點づゝを選び、女生は更に裁縫・手藝品を加へ、高等科男生の手工品をも出品し、總べて約五百點以上の多きに及んだ。その手工品には、カヌー模型（長さ一尺五寸・徑三寸許の濱桐材を刳抜きて細工を施し、帆を取つけ、エナメルにて塗り上げたもの）・障子凧（長方形の絲目多く長さ數間に及び、獨特の鎭西八郎を描き出したもの）兒童戰ごつこの冠り物（海軍將校の禮帽に似た三角形の袋に、金銀紙の裝飾を施したもの）と扇浦小學校の茶匙（本島產印度竹に彫刻加工したるもの）があり、歸化人家屋、ババヤ・タコの實及び椰子樹の寫生畫などもあつた。

陛下は御脫帽にて室內に入らせられ、校長の御說明で、順次御通覽遊ばされ、手工品の如き、又歸化人兒童の出品には特に御注目遊ばされしやに拜せられ、知事に對して、全島の校數及び島民の敎育上に御下問あらせられ、約十五分間の久しき、隈なく成績品の天覽を辱うするを得たのである。

成績品を觀はせて後、特に校庭へ御出まし遊ばされ、特設の壇上に立たせたまひ、知事の發聲で萬歲を唱へ奉り、父島兩小學校兒童及び靑年團員一同三たび唱和し、龍顏殊にうるはしくこれを受けさせられ、次に要塞司令部へ向はせたまふ。

第四節　要塞司令部

要塞司令部に於ては、和田第一師團長・安達要塞司令官以下に拜謁を賜ひたる後、種々國防上其の他の重要な奏上の儀があつたと承はる。畢つて御小憩の間もあらせられず、順路支廳に臨幸したまふ。

第五節　小笠原支廳

午前十時　陛下には支廳に成らせられ、高橋支廳長が御先導申上げ、物產陳列館の階上で、奉迎文官有資格者に拜謁仰付けられ、全島各村世話掛（硫黃島は缺）、自治・產業功勞者には、奉拜を許された後、知事から恭しく島情に關して詳細奏上するところがあり、二三御下問あらせられ、更に獻上品に就いて、知事・支廳長がこれを御披露申上げたのに對し、一々御嘉納遊ばされた。夫より窓外、三日月山溪谷にある森林

の實狀を御覽じ給ひ、豐島營林署長から御說明申上げた。同場階下では、特に林投・葉及び桑材細工品・貨幣石其の他化石類・鳥類の標本・綠蠵龜・珊瑚等に御注目あり、服部御用掛りからの御說明をも聞召され、特産小笠原桑の漸次減耗してゐるのを特に惜ませらるゝ御言葉を拜し、館外では飼育中の鰐並に採集した珊瑚礁・海サボテンの各種・菊目石等御巡覽あらせられ、午前十時五十五分、農事試驗場へ向はせ給ふ。

第六節　農事試驗場

場內では知事・支廳長御案內申上げ、特に熱帶植物の各種に就いて御注目あらせられ、カラジユームの實生に關しては詳細御說明を聞召され、又龜生洲に於ては約五十頭の綠蠵龜を御覽あらせられて、やがて一旦御歸艦遊ばさる。

第七節　御歸艦

午前十一時二十分　陛下には大村棧橋から　天皇旗を揭揚した御召艇に移らせられ、御上陸の際と同じく諸員が御見送りの裡に、同三十五分、無事御歸艦あらせられ、山城・春日からは皇禮砲を發し、春日外驅逐艦では各登舷禮を行ひ、萬歲を三唱し、知事・支廳長は御召艦に御伴申上げた。

第八節　午後の御上陸

陛下には、御召艦にて御晝餐御休憩の後、午後一時十五分、白地御背廣にヘルメットの御輕裝で、非公式に清瀨捕鯨棧橋から再び御上陸あらせられ、龜孵化場から清瀨公園を過ぎ、奥村へ向はせらるゝ御途上、隨所に植物の狀態を御注目あり、殊に大樹の切株に就ては、幾度か御手づから御研究遊ばされ、海岸に沿ふた並木の蔭では、東京附近よりも暑くないとの御意で、炎熱華氏百三十度も超ゆるのを御厭ひあらせられず、奥村に玉歩を進めたまひ、先住民族の子孫である歐米歸化人の奉拜を受けさせられ、無線電信所への小徑を厭はせたまはず、清瀨高臺から兄島瀨戶あたりを御展望あらせらる。次で本道を一直線に、清瀨公園まで急速力で御下山あらせられ、清瀨では更に植物の切株御研究の御事あつて後、再び捕鯨棧橋から艀に御移りあつたが、當日は恰も陰曆七月三日の大汐に際し、午後一時から二時迄の間は、最大干潮時であるので、河合土木技師が豫て綿密に計算して、最大干潮時に處する設計の下に、棧橋の踊場をしつらへ置けるが、順路御見學の時間は、御豫定よりも延長したのに拘はらず、僅に約二十分に過ぎなかつた爲、汐工合に大差を生ぜず、御安全に棧橋御通過あらせられたのは幸慶に堪へないところであつた。

第九節　二見岩其の他の御採集

斯くて御艀では、支廳長の御陪乘を許させられ、二見岩附近に特設の網生洲に蒐集してあつた近海の魚介類を御見學の資に供へまつり、屏風谷沿岸から白星附近に至る間で、深さ手頃の海底を覗眼鏡で御覽じられ、潛水夫の作業によつて、海膽・海參其の他小動物並に各種珊瑚礁などの御採集があり、約一時間の後、山城の艦載水雷艇に御移り遊ばされ、午後三時、扇浦へ向はせたまふ。

第十節　開拓碑・連珠谷・試驗林御巡覽

支廳長は、千鳥で先着し、扇浦埠頭にて村民整列の裡に御迎へ申上ぐ。扇浦は此程から大規模の道路改修を行ふた結果、行幸道路とも申すべく、全く其の面目を革めた。御道筋には村民が列を正し、小學校兒童も再び門前に整列して、奉迎送申上ぐ。陛下には、日本役所址・開拓碑の事に就いて、知事・支廳長から御說明を聞召し、附近御覽の上、三時三十分、連珠谷の國有試驗林へ向はせられ、途上植物の御研究あり、谷川ではダボハゼの産育を御下問あらせられ、やがて溪間の平地にしつらへた御休憩所に御着、營林署長から本島産植物、殊に特殊植物帶に就き、ヒメタニワタリ・ヘゴ・メヘゴ・マルハチ・リウビンタイ・マツバラン・シマシシラン・ヒデ（シママムロ）・タコ・磯松・野梱子其の他の御說明申上げ、種々御採集遊ばさる。

第十一節　洲崎濱其の他の御採集

かくて午後四時過御立にて、御歸途尙も植物並切株の御研究あり、五時、扇浦埠頭から、艦載水雷艇に御召の上、洲崎濱へ向はせられ、支廳長は又も千鳥で御先行申上げ、濱邊に於て御待申上げ、假棧橋から御上陸、防風林內御道遙の後、濱邊にて貝類の御採集あり、時間の餘裕を以て、更に屏風谷沿岸御覽の旨仰出され、御召艇で御出發あらせらる。支廳長は、この時、洲崎農園特產の西瓜獻納の手續を了つて、千鳥にて急行御伴申上ぐ。屏風谷沿岸に在つては、全く日沒頃まで魚介類の御採集を試ませられた上で、無事に御歸艦遊ばさる（此所にて御覽の兎貝は、翌早朝服部博士が採取さる）。知事・支廳長は、御召艦迄御見送申上げた。

第十二節　御召艦御陪食の御沙汰

當夜御召艦にては、關屋供奉長官・珍田侍從長・奈良侍從武官長・西園寺御用掛・木下侍從及び和田第一師團長の外に、平塚知事・山岡警保局長・木島警務部長・豐島農林技師並に安達司令官・茅野少佐・田島無線電信所長等を御陪食に召させられ、支廳長も亦その御恩旨に浴したのは、重ね〳〵の光榮と申すの外ない次第であつた。

陛下には御興いと深く拜せられ、二見岩附近の海中御採集は、殊に御見學上御意に召したるやにて、連珠谷に關しては小笠原植物の自然狀態に就き種々御物語遊ばされ、尙再び小笠原桑の減少を惜ませたまひしやに洩れ承はる。又、知事に對し、龜の孵化に關しては、再三の御質問あり、支廳長には、カラジユームの實生には、メンデルの法則を應用し居るやなどの御言葉を下されたるなど、本島の殖産上に就き、叡慮を垂れさせたまふたのは、畏き極みであつた。

御陪食の後、支廳長は南洋產貝類の標本到着につき、直ちに天覽に供し奉つた。陛下には、その中にて本島沿岸に棲息する貝類に就ての御下問あり、野口技手代つて奉答申上ぐ。折しも大村・扇浦兩方面から村民が手に〳〵紅提灯をさゝげて、發動機船數十隻に分乘し、御召艦附近を進行した　陛下には畏くも御手づから提灯を打振りたまひつゝ御受け遊ばさる。

第十三節　恩賜御目錄

當夜は、畏くも御下賜品の御沙汰があり、支廳長はこれを拜戴し、午後十時過、御召艦を辭したが、其の御目錄御沙汰書は左の通りである。

一金壹千圓（敎育御奬勵の爲）

小笠原支廳

一御紋章附銀盃壹箇
一御酒肴料
一御紋章附卷煙草
一御酒肴料
一絽縮緬　壹匹
一御菓子

同

敎育奬勵費の御沙汰書

東京府小笠原支廳

今般當廳敎育奬勵費トシテ金千圓下賜候事

昭和二年七月三十日

東京府小笠原行幸關係員
同
小笠原支廳長
同
同

宮內省

第十四節　御診療

御思召によつて、特に住民の爲侍醫をして診療を行はしめらるゝ旨は、曩に船中の行幸主務官から知事宛に電報があつたので、夫々準備して置いたが、父島では七月三十日、八田侍醫・黒田侍從を御差遣あらせられ、大村醫務所を診療所とし午後一

時から診療を開始して、午後四時迄に診療を受けた患者は十九名に達し、數日間の投藥を受け何れも　聖恩の厚きに感泣した。

第二章　行幸第一日

第一節　父島御發航

七月三十一日、天氣快晴、午前七時、支廳長は知事と共に、濱風に便乘して御召艦に伺候すれば　陛下には、八時前、甲板に出御あらせらる。父島海岸には、大村境浦扇浦を通じて、國旗を手にした島民が充滿し、大村側からは、發動機船に曳かれた數十隻のカヌーに島民を滿載して出港し、海陸一齊に御召艦の御出發を奉送するを見る。

午前八時　天皇旗を揭揚した山城は、登舷禮と喇叭の吹奏裡に錨を抜き、羽風以下四隻の供奉驅逐艦を隨へて徐かに父島沖を發航し、父島々民は海陸同時に萬歳を高唱し御名殘を惜み奉つた。

第二節　島情言上

御召艦の南島御通過の頃、木下侍從から只今の時間に、島情を言上あるやうとのことに、支廳長は恐懼しつゝ、甲板上の玉座に咫尺し奉り、珍田侍從長・奈良武官長・關屋次官・和田師團長・山岡警保局長・今村裁判所長・平塚知事等は御前に列立す。支廳長は鞠躬如として、昨日知事から言上あつた事項以外の、敎育・產業に就き叡聞に達し、產業の振興上、大正九年以來、糖業が漸次不振に陷つた爲、栽培法の改良・機械の應用に意を用ひ、甘藷耕作の奬勵を圖り、又陸稻・粟等の試作を行ひ、生產額の增加と、生產費の低減を期し、一面、蔬菜・果樹・觀賞植物等の副業を奬勵し、又本年度に於て試驗した養蠶が極めて好成績を示したので、本年度からは一層この方面に力を用ひんとし、更に水產業の發達を期してゐるとのことから、昨年度に於ける珊瑚の大收獲に言及するところがあり、和田師團長からは珊瑚採收方法の改良に關する意見あり、又町村制施行のことに就いても、產業の振興を圖り、生活の安定を期し、出來得る限り速かに自治制の施行を希望する旨を言上し、山岡局長からの意見もあつた。

陛下には、畏くも種々微細の點に亘つて御下問あらせられ、更に辱けなき叡旨を下させられたるを拜したのは、島民の光榮としてこれに過ぎたるものはない。

時恰かもワントネ沖御通過の際とて、支廳長は、この沖合が五年前の珊瑚採收區で、本年六月亦新たにこれを發見したが、潮流最も急激で、優良品若干を採收したま

ゝ目下休場に屬してゐること並に鰹・鮪・鰹等の有望なる漁場である旨を言上し、漁業に關聯して、一昨年五月二十七日、奥村に住む歸化人サミユール・セーボレー(海軍一等水兵、三十歳)の漂流談をも、一挿話として言上に及び、更に本日　臨幸御上陸を仰がんとする母島の民情から、沖村は本島中最も農事に熱心で、擧村一致して、害草、紫カタバミ(スツバ草)の侵殖を防止し居ること、日本酒・ビール・サイダー等を却け、手製砂糖酒のみを用ひゐる旨を言上したのに、畏くもその成分に就て、衞生上の功過を大御心に掛けさせたまふ御旨を拜した。

御召艦は進んで、乾岬に差しかゝり、支廳長は母島の地勢を御展望あらせられたい旨を申上げ、謹みて御前を退いた。折しも乾岬の鬼岩附近(ワントネの一部)に群れ飛ぶ海鳥に御目を注がせたまひ、カツヲ鳥かと申上げたのに、畏くも、海猫(鷗の一種)なるべし、海中には魚群あらんと仰せられた。事實このあたり、近海中には最も魚群が夥しい處で、列立者一同、御眼識の程に感嘆せざるものはなかつたと申す。

第三章　母島行幸

七月三十一日、天氣は晴朗海上は平穩である。午前八時、警備艦春日は沖港に投錨し、河井宮內屬板倉府屬及び太田春日艦長・石川同艦航海長並に豊島營林署長・加藤支廳水產課長・野口技手は先づ上陸し、御道筋・小學校・ロース石山・南京濱等を檢分す。

午前十時三十分、供奉艦太刀風・羽風・秋風・帆風の四驅逐艦を先頭に、御召艦山城は徐々として入港と共に、滿艦飾を施して投錨すれば、皇禮砲は先づ春日から發せられた。

御召艦に御陪乘の平塚知事・高橋支廳長は、その間一旦春日に移り、打合せの後、先着の千鳥で御先行上陸し、沖村に於ける奉迎の模樣を視て、埠頭に御待受け、千鳥は直ちに御召艇の水先案內として御召艦へ向うた。沖村埠頭から海岸防風林一帶を始め、沿道には沖・北兩村の各官公吏・村總代及び赤十字社員・愛國婦人會員・在鄉軍人分會員其の他一般奉迎者が、いづれも所定の位置に整列す。

第一節　御上陸

天皇旗奉揭の御召艇に御移乘、御召艦及び春日陛下には、前日同樣の御服裝で　の皇禮砲殷々たる裡に、千鳥の水先案內、春日の水雷艇誘導に由らせられ、埠頭約二町の海上で更に艀に御移乘、午前十一時十五分、假棧橋に成らせられ　天機いと麗

はしく御上陸遊ばさる。

御先行は矢野侍從武官が奉仕し、供奉長官關屋宮內次官、珍田侍從長・木下行幸主務官・奈良侍從武官長・平塚知事以下を隨へさせられ、別に山城艦載ランチにて御供した山下軍事參議官・安保橫須賀鎭守府司令長官・山岡警保局長・和田第一師團長・木島警務部長・今村東京地方裁判所長と、先着の高橋支廳長及沿道兩側に整列した、奉迎者の最敬禮に對し、畏くも御會釋を賜はり、警保局長其他扈從しまゐらせ、園藝會員等の手で陳列したカラジユーム其の他盆栽に御注目あつて、順路沖村小學校に成らせられたのは、午前十一時四十五分であつた。

第二節　沖村尋常高等小學校

沖村小學校では、校庭に沖・北兩小學校兒童と、青年團員・沖村處女會員等約五百名が奉迎し、一同の最敬禮に對し、畏くも擧手の御答禮を賜ひ、校庭を蔽へる左右二株のガジユマル樹を繞はせられた上で、校長の御先導に由らせられ、玄關から廊下に御入り遊ばさると同時に、御帽子を脫がせられつゝ、兒童成績品陳列場に就き親しく天覽を賜ひ、その一つ〳〵に御目を留めたまひ、殊に各學年毎に合冊に成れる綴方の一枚々々を展べさせられたのは感激の外なく、椰子と林投樹の配置されたのをみそなはしては、その南洋氣分に富んだのを賞でさせたまふ。

次に物產陳列所に成らせられ、仔細に御熟覽を賜ひ、桑製大火鉢を御覽じられて「好い光澤だな……惜いなあ」と仰せられたのは特產名木が減少するのを御心にかけたまひてなるべく、其の他黃櫨の大火鉢、桐檀の文箱・桑のステッキなど御覽あり、林投樹の葉にて製した帽子二箇の御買上を賜はつたは　御弟宮御二方への御土產とてなりと洩れ承はる。又、ロース石に就ては「水成岩と火成岩との混成岩で耐火耐水の力が强く、而も鋸にて切斷し得、鉋にて削り易く、容易に加工せらる」との御說明を聞召し、やがて玄關から再び校庭に成らせたまふ。

校庭では豫てしつらへたる御壇に登らせられ御直立あり、一同最敬禮、平塚知事の發聲で「天皇陛下萬歲」を唱へ奉り、一同これに和して萬歲を三呼し、再び最敬禮す陛下には畏くも御答禮を賜ひ、校長が恭しく校門にて奉送申上げたのは、時、正午に早きこと五分であつた。

第三節　ロース石切場

陛下には、順路、七軒町からロース石切場に御立寄あり、供奉の服部御用掛が主として御說明申上げ、石切場の斷層及び地質を御實檢の上、埠頭に還らせられ、各員奉

送、艀から御召艇に移御、山城・春日の皇禮砲轟き、各登舷禮の裡に、無事御歸艦あらせたまふ。

第四節　南京濱の御採集

午後は非公式で御見學の爲、南京濱に成らせらるゝに由り、高橋支廳長は春日の艦載水雷艇にて、御召艦まで御伴奉送の上、春日から、午後一時、千鳥で南京濱(椰子濱)に先着、御待受申上ぐ。この地は、貨幣石などの露出多く、御採收絶好の場所であるが、沿岸には暗礁が少くなく、且夏季土用浪の際には、一脈の白波を見てすら御上陸は御取止あるに似ず、數日來の好晴平穩は、全くその虞れなきを認め、母島在鄉軍人分會員の應援にて急造した假棧橋から、安全に御上陸の設備は整へられた。

陛下には、御白服(背廣)ヘルメットの御輕裝で供奉午前に同じく、午後一時十五分、御着艇の上、假棧橋から御上陸あらせらる。知事・支廳長及び豐島技師から、附近の地質並に植物に關する御說明を聞召し、直に貨幣石を御採集遊ばされ、岩蔭にて水着御召替の上、水中小動物の御採集を試ませられ、西園寺御用掛と土屋甘露寺の兩侍從等は、別隊を編成して、カヌーを率ゐ、サボテン外小海族を採集あり、陛下には、御採集の多量であるのに、御感斜ならざるやにて、炎天烈日の下に、時刻を移させられ、午後四時からは、更に艀に召して、海中御見學あり、母島漁業組合選出の潛水漁夫は、御命を畏み、海藻・介類・珊瑚礁其の他各種の採集品を差上げ奉り、五時過ぐるころ御採集を止めさせられて、五時三十分御歸艦あらせらる。

第五節　供奉官視察と御診療

關屋次官・横溝書記官の一行は、この日午後、母島支廳出張所、沖村役場同小學校並に村内の視察あり、村山侍醫の一行は、内科患者十七名に對し村役場で一々診療の上、夫々午後六時三十分歸艦した。

第六節　提灯行列

村民一同は夜に入るや、提灯行列を行ふため海岸に集まり、一隊は十隻の發動機船にて海上に列し、御召艦に向ひ、午後八時半、水陸一齊に萬歳を三唱し、紅提灯の火影が、海波を壓する裡に　陛下には、甲板に進ませたまひ欄干近く畏くも提灯を御手に御會釋を賜はつた。折柄新田母島出張所長が支廳献上品のニームライト及び築館甲保の献上品鮫齒化石類を携へて上艦したに對し、甲板にて親しく御嘉納あらせたまふ。

第四章　小笠原島御發航

八月一日、引つゞき天氣は晴朗で海上は平穩、午前六時三十分、支廳長は、先づ春日に抵り、知事と共に御召艦に伺候し、七時三十分、甲板で伺候の面々に拜謁を賜ふ。

陛下には、更に支廳長に對し、ダボハゼの棲息上に御下問あらせられ、又陸棲貝類の御採集に就き、御意を拜するところがあり、更に〳〵親しく優渥なる御諚を蒙るの光榮を辱うしたのは、全島民が齊しく感激に堪へないところである。

やがて御發航の時刻が迫り、一同御召艦を拜辭して春日に移り、艦橋に整列して御見送り申上ぐる中に、正午直前、さやけき喇叭が響き亘ると共に、天皇旗は燦として山城の檣頭に高く、一きはの輝きを拜し、その滿艦飾は、春日のそれと相映發して、皇禮砲は殷々と小笠原の全島に轟きつゝ、供奉の各驅逐艦を隨へ、御召艦は堂々として、前人未踏の航路を一路、九州佐伯灣へ向はせらる。威容の嚴肅眞に太平洋上を壓し、沖港から出た發動機船・カヌー船の全部は一直線を描いて出動奉送し、沿岸は見渡す限り老幼男女が、これと相應じて、國旗を打振り〳〵海も搖げと萬歲を高唱した。前後三日に亘つて、千載忘るることのできない至尊の玉跡を辱うしたのに感泣した民草はまごゝろこめて御名殘惜しさに、御艦の影が只いつまでも〳〵と慕ひまゐらせたのである。

附記

軍艦春日は、先發として七月二十九日午前六時、父島二見港に入港し、母島を經て、八月一日に歸還した。

天皇陛下には、御機嫌麗はしく、御豫定の通り還幸被遊旨、八月十日、宮內大臣から小笠原支廳長宛左の通り電報が到達した。

天皇陛下、御豫定の通り、橫須賀軍港御入港、午後四時五十分、赤坂離宮へ還幸被遊、天機殊の外麗敷被爲渉、貴地行幸中の御心勞を謝す。

第五章　獻上品

行幸に就き獻上したものは左の如くである。

品名	數量	獻上者
アレカ	一鉢	東京府知事　平塚廣義
小笠原タコの木	同	同

ケンチヤ	一鉢	東京府知事平塚廣義	
カラヂユウム	四鉢	同	
ノヤシ	一鉢	同	
小笠原島寫眞帳	一冊	同	
ヘゴ	一鉢	小笠原支廳長高橋延壽	
熱帶植物寄せ植	同	同	
カラヂユム寄せ植	同	同	
熱帶果實	四籠	同	
フエニックス	一籠	同	
小笠原島國有林寫眞帳	一冊	小笠原營林署長豐島恕清	
小笠原島主要林木材鑑	一組	同	
小笠原島森林植物腊葉	同	同	
ヘゴ	一鉢	同	
マルハチ	同	同	
一葉蘭	同	同	

小笠原シマシヽラン	同	父島在鄉軍人會	
シマムロ	同	同	
松葉蘭	同	同	
イソ松	同	同	
テリバヘコ	同	同	
リユービンタイ	同	同	
ヒメタニワタリ	同	同	
バリケン	二番	同	
鮫の齒化石	一個	母島沖村築舘甲保	
魚類の脊髓の化石	同	同	
貨幣石	同	同	
貝化石	二個	同	

尙八月十一日、支廳長が赤坂離宮に伺候して、獻上したものは左の如くである。

品名	數量	獻上者
ヒロセ貝	一個	東京府知事平塚廣義

イモ貝	一	個	東京府知事 平塚廣義	七八
シヤコ貝	同	同		
カタツムリ貝	同	同		
ムラサキカキ	同	同		
ツノナシサザイ	同	同		
二枚介（深サ八十尋内外ニ棲息スルモノ）	同	同		
水宇貝（硫黄島産）	二	個		
ダボ（淡水魚、母島北村産）	三	個		
ダボ（同 父島大村）	一	個		
オガサハラカワラヒワ（クザエモン）	△一	羽		
硫黄島メジロ	△同	同		
オガサハラヒヨドリ	△同	同		
ハシブトヒヨドリ	△同	同		
硫黄島ウグヒス	△同	同		
赤尾熱帶鳥（ボースン）	△同	同		
オガサハラミズナギドリ	△同	同		
オガサハラカラスバト	△同	同		
目黒	二	羽（生鳥）		
オガサハラカラスバト	一	羽		
陸生貝類	七	點		
カタテ蟹	一	點		
砂蟹	同	點		
カワニ	同	點		
メナガカニ	同	點		
淡水産貝	二	點		
貝殻（父島南崎産）	一	點		

小笠原營林署からの献上品は左の如くである。

一小笠原島國有林寫眞帳　一冊（十二枚貼）

內譯

木性羊齒林の遠景（母島桑の木山）

木性羊齒林（父島旭山）

ノヤシ林
普通林林相
オガサハラタコノキの竝木
アカテツの隆起せる板根
オガサハラクハムニンウドノキ
テリハボク林
ハスノハギリ林
リウキウマツ人工植栽林
インドゴムノキ人工植栽林

一小笠原島主要林木材鑑

内譯

オガサハラクハ(黒)
オガサハラハマボウ
テリハボク
センダン

一箱(二十種入)

オガサハラクハ(黄)
ヤマアサ
シマボウ
ヤロード
ムニンシヤリンバイ
アカテツ
アデク
アカウサンセウ
ハスノハギリ
ビラウ

一小笠原島森林植物腊葉

内譯

ヒメタニワタリ
ムニンヘゴ
テリバヘゴ
アサヒエビネ
イソマツ
ホソバテンノムメ
オガサハラツヽヂ
ムニンヒメツバキ
シマイス
シマモクセイ
シロテツ
シマムロ
ムニンヘゴ

一箱(三十五種入)

フサシダ
マルハチ
シカウラン
オガサハラオニク
ムニンノボタン
テンノウメ
オガサハラクロキ

クサトベラ
オガサハラクチナシ
ムニンウドノキ
シロテツ
ハスノハギリ
アデク
ムニンヒメツバキ
ヤロード
シマボウ
ヤマアサ
オガサハラハ

一小笠原森林鉢植

内譯

マツバラン
ヒメタニワタリ
ニガナノキ
ハハジマヤツデ
シマムロ
アカテツ
シマモクセイ
シマイス
ムニンシヤリンバイ
センダン
テリハボク
オガサハラハマボウ

十種

ムニンシヽラン
リウビンタイ

ムニンヘゴ
テリバヘゴ
イソマツ

正規の手續によらず學術上の御參考のため獻納したものは次の通りである。

貝類の部

タケノコ貝
リユーキユータケ
キバタケ
イモガヒ
ホラガヒ
タカラガヒ
ウミウサギ
クモガヒ
スイジガヒ
ギンタカハマ（ヒロセ貝）

第二篇 正記

マルハチ
シカウラン
シマムロ

Family Terebridae.
Terebra Subulata Lam.
Terebra Crenulata Linne.
Family Conidae.
Aspta Tritonis Linne.
Family Cypvaeidae.
Ovula Orum Linne.
Pteroçra lambis Linne.
P. chiragra Linne.
T. obeliscus Gmel.

5—

カサガヒ（ヨメガサ）　H. nigris quamatus Rve.
シヤコ　Tridasmat gigas Lam.
アカガヒ　Area inflata Rve.
アマガヒ　Nerita Pica Gould.
カベレ子安貝
小笠原子安貝

珊瑚礁の部

クサビライシ　Fungia sp.
ハマサンゴ　Porites sp.
ミドリイシ　Madre pora sp.

第六章　拜謁・奉拜

支廳に於て拜謁仰付られたる者は次の通りである。

東京府知事　平塚廣義
東京地方裁判所長　今村恭太郎
内務省警保局長　山岡萬之助
内務省防疫官　飯村保三
警視廳警務部長　木島茂
東京遞信局書記官　加藤惠義
小笠原營林署長　豐島恕清
地方技師　加藤勢三
東京地方裁判所檢事　棚町丈四郎
東京府土木技師　河合清
警視廳警視　内繼喜
内務省事務官　宇都宮孝平
小笠原支廳長　高橋延壽
警視廳防疫醫　柏木正章

支廳に於て奉拜仰付られたる者は左の通りである。外に農事功勞者として堤德藏も奉拜を仰付られたが、便船の都合上にて參廳するを得なかつた。

大村世話掛事務取扱　村井介之允

扇村袋澤村世話掛　村岡常一
沖村沖村世話掛　猪子徹雄
北村北村世話掛　平塚文野
自治功勞者　志村文次郎
農事功勞者　青野正三郎
自治功勞者　久世延吉
社會敎化事業功勞者　デヨセフ・ゴンザレス

小笠原支廳職員

地方事務官(支廳長)　高橋延壽
地方技師(水產課長)　加藤勢三
東京府屬(庶務課長)　村井介之允
同　平塚寬策
同　(會計課長)　吉原三代吉
同　壬生政道
同　石田定吉

東京府技手(勸業課長)　大道金松
同　辻長次郎
同　伴善居
同　天野日出雄
同　井上璋
同　遠山宣雄
同　石津龜吉
同　沖山彌平
同　野口衛敏
同　野口貞美
雇　島左盛
同　沖山慶次郎
囑託　劒持久吉
同　釜谷玄造
同　石津運平

囑託

臨時雇沖山金四郎、同佐々木軍三、水夫高橋弥松（千島運轉手）

父島大村世話掛事務取扱東京府屬　村井介之允
父島扇村袋澤村世話掛　村岡常一
父島大村尋常高等小學校長　峯岸總五郎
父島扇浦尋常高等小學校長　塚本福藏
母島出張所職員
東京府技手兼屬（所長）　新田瑞氣
東京府屬　佐山好一
同　和久田清次郎
母島沖村世話掛　猪子徹雄
母島北村世話掛　平塚文野
母島沖村尋常高等小學校長　管谷脩德
母島北村尋常高等小學校長　森山賢包

與山菊一

第七章　御買上品

本島産業奬勵の　御思召を以て、特産品御買上の光榮に浴し、左の通り上納したのは、當業者は勿論のこと、島民の感激措く能はざる處で、益々奮勵努力して斯業發展を期すべきである。

品名	數量 父島	母島	計	單價	小計	備考
バナナ	二五貫	二五貫	五〇貫	円 七五〇	三七五〇	
西瓜	二五貫	四五貫	七〇貫	六五〇	四五五〇	
パパヤ	五箇	五箇	一〇箇	三〇〇	三〇〇	
棕梠葉團扇	一〇〇本	—	一〇〇本	一五〇	一五〇	
林投葉文庫	二組 二組	—	二組 二組	三〇〇〇 四〇〇〇	六〇〇〇 八〇〇〇	
林投提籃	一〇組	—	一〇組	二〇〇〇	二八〇〇	
林投卷煙草入	三六個	—	三六箇	大 五五〇〇 中 五三〇〇 小 五〇〇〇	六〇〇〇 六三〇〇 六〇〇〇	
林投帽子	—	二箇	二箇	八〇〇〇	一六〇〇〇	
桑盆	一〇枚	二〇枚	三〇枚	—	三四四五〇〇	

品名	數量	單價	小計	備考
	父島 母島 計			
桑茶卓 大 一三組 小 七組	一八組 七組 四〇本	三円八〇〇 三五〇〇 一四〇〇	六八円四〇〇 二四五〇〇 五六〇〇	
桑ステツキ	三〇本 一〇本			
鮪節	一 三貫	九〇〇〇	二七〇〇〇	
計	三貫		六九八三六〇	

（附記）

供奉員に於て本島を開發し、且汎く社會に紹介する意味で、本島の特産加工品を購入せられたのは、島民の感謝する處である。

其の種類を掲記すれば左の如くである。

桑指物
桑挽物
桑ステツキ
棕梠ステツキ
棕梠葉團扇
林投葉文庫
バナナ煎餅
觀賞植物

第八章　御用度品輸送

御用度品は、左記の通り宮内省から回付せられ、行幸に先だち、最近便の定期船芝罘丸（七月十六日横濱發）にて、特別扱御用物として、鄭重に輸送し、到着の上は、支廳内で嚴重に保管したが、七月三十一日御使用濟となつたので、御召艦山城で返還の手續を了つた。

一、絨毯　二枚　支廳並要塞司令部御休憩所用
一、卓子　二脚　同
一、卓子掛　二枚　同
一、椅子　三脚　支廳、要塞司令部、連珠谷御休憩所用

第九章　新聞記者慰勞

七月二十九日正午、行幸の爲來島した新聞記者一同を、林カフエーに招待して午餐を供し、知事及支廳長の挨拶があつた。

第三篇　後記

第一章　行幸直後

第一節　春日の歸航

軍艦春日は警備艦としての任務を完了して、八月一日午前十一時母島沖港を發し父島に向ひ、同午後二時二見港に入港した。

同艦には、知事一行の外、安保横須賀鎭守府司令長官・和田第一師團長・今村東京地方裁判所長・山岡警保局長・木島警務部長・加藤遞信局書記官・其の他關係官吏一行及び新聞記者團十數名これに便乘し、二見入港の後、知事は物産陳列館階上に於て、支廳員に對し訓示する所あり、其の他一行も上陸して夫々用務を辨じ、午後六時に、八丈島經由、八月四日橫須賀歸着の豫定で出帆した。

第二節　記念繪葉書の配付

東京府では今回の行幸を記念するため、記念繪葉書一組三枚を調製して、軍艦春日に一千三百餘組を托送したので、八月二日、支廳員・各世話掛・村總代・小學校教職員兒童・青年團・處女會・在鄉軍人分會員等に對し、全島を通じて普遍的に配付を終つた。

第三節　御下賜品の配付

八月三日午後零時半から、廳員一同物産陳列館階下に參集し、殘務處理の打合せを爲したる後、曩に行幸關係吏員に對し、御下賜相成つた酒肴料と御紋章入卷煙草、知事及支廳へ御下賜相成つた御菓子並に知事から支廳員に給與せられた慰勞金を夫々分配手交した。

第四節　世話掛協議會と關係員慰勞

八月四日、各村世話掛(硫黄島は缺)並小學校長が參集し、殘務整理、敎育御奬勵金の支途、行幸記念事業等に關し愼重協議を爲した。

同日午後五時から、物産陳列館階上に於て、支廳員一同並に東京府よりの出張員父母兩島世話掛・小學校長等參集、御下賜の銀盃を披露し、尙行幸に關する各自の感想を陳べ、終つて慰勞の小宴を催した。

第五節　諸船の出入

八月四日午前六時に、南洋定期船八幡丸は、特に二見港に寄港して、同日午後零時、內地へ向け出帆した。同船にて警視廳並に憲兵隊からの出張員、新聞記者團等が歸途に就いた。

八月四日、定期船芝罘丸が內地から七日午前六時、筑前丸が南洋から入港して、午前十一時に出帆、正午、芝罘丸も亦出帆した。同船にて支廳長上京し、殘務整理中であつた府の河合技師・加藤屬等の一行も歸途に就いた。

第二章　支廳長上京

第一節　奉迎と獻上

支廳長は　行幸直後の殘務處理の後、豫て　陛下から御言葉あらせられたる棲の貝類・ダボハゼ・目黑・小笠原大蝙蝠及び鳥類の剝製・貝類の標本等を獻上し、且御禮言上の爲、芝罘丸にて出發、八月十日、東京に到着した。恰も　御還幸の當日であ

つた爲、知事に隨伴して、東京驛にて奉迎の後、赤坂離宮に伺候し、翌十一日、更に知事に隨伴伺候して前記の品々（獻上品の項參照）獻上の手續を了つた。

第二節　御下賜金

八月十六日、御沙汰によつて、支廳長は知事に隨伴伺候したところ、行幸の際に於ける關係村に對して金參百圓、同在鄉軍人分會青年團に對して金貳百圓の御下賜金を拜受した。支廳長は　聖恩の渥きに感激し、即日支廳に對し、電報を以て其の旨を通じ、取敢ず關係者に傳達せしめた。

御沙汰書は左の通りである。

今般其地行幸ノ際諸事盡力ニ付特ニ金參百圓下賜候事

昭和二年八月十一日

東京府小笠原島行幸關係村

宮内省

今般其地行幸ノ際諸事盡力ニ付特ニ金貳百圓下賜候事

東京府小笠原島行幸關係在鄉軍人青年團

宮内省

昭和二年八月十一日

第三章　支廳長歸島後

第一節　記念品の傳達式

八月二十一日午後四時、物産陳列館の階上に於て、曩に府知事から表彰せられた左記五名に對し知事からの記念品傳達式を擧行した。

この五名は　行幸の際、本島に於ける自治又は產業の功勞者として特に奉拜の光榮を擔つた人々である。

父島扇村　志村文次郎

同　大村　青野正三郎

同　同　久世延吉

同　同　ジョセフ、ゴンザレス

東京市芝區二葉町　堤德藏

第二節　御下賜金の傳達

行幸關係村並在鄕軍人分會青年團に賜つた御下賜金は、八月十六日其の額を左の通り定め、各關係村には世話掛及村總代、在鄕軍人分會青年團には其の會(團)長及幹部を參列せしめて夫々傳達式を擧行した。

一金百圓	父　島　大　村
一金五拾圓	父島在鄕軍人分會
一金參拾四圓	父島大村青年團
(以上九月十二日午後三時から物産陳列館にて)	
一金百圓	父島扇村袋澤村
一金參拾參圓	同扇村袋澤村青年團
(以上九月十三日午後三時から扇村小學校にて)	
一金百圓	母　島　沖　村
一金五拾圓	同在鄕軍人分會
一金參拾參圓	同沖村青年團

(以上十一月二十五日午後三時から母島出張所にて)

母島の傳達が遲くなつたのは、十月一日稀有の大暴風雨が本島に襲來した關係によるのである。

御下賜金を戴いた村、軍人分會、青年團では何れも之を基本金として、積立を爲し逐次增殖を計ることに定めた。

第四章　行幸記念事業

本島空前の盛事である行幸を永遠に記念する爲支廳、各團體にては夫々經費並其の團體の狀況を參酌して、尤も適當と認められる記念事業を計畫し又は已に實施したものは左の如くである。

一、敎育御奬勵金の支途

御下賜金壹千圓と、大村關谷倉吉寄附の壹千圓とを合して、支廳管理の下に郵便貯金とし、其の利子を以て年々各小學校卒業生の最優秀者(一定の標準に合格したもの)に對し、恩賜記念賞を授與し、尙各小學校に對し、器具・機械・標本類中適當と認むるものを購入交附し、又は購入費に補助を與ふるものとした。

二、青年團の統一

各村には已に夫々青年團の組織があつて活動してゐるが、各島の距離近きも四十浬、遠きは二百浬にも及ぶ關係上、其の統一は困難であつたところ、近來之れが聯絡統一の必要を感ずるに至つたので、今回の　行幸を機とし且之を永久に記念する爲、小笠原島聯合青年團の組織を全うするに至つた。

三、行幸記念貯金

島民貯蓄の狀況に關しては、特に　御軫念遊ばされたる次第にて、加藤遞信局書記官からの希望もあつたから、郵便局と協力して、島民の貯蓄を奬勵し、又特に各團體に於て　行幸記念の意味に由り、規約貯金の口座を特設奬勵した結果、從來の規約貯金率が著しく增加した外、左記團體は新に組合を組織するに至つた。

小笠原支廳員（從來の規約貯金以外に）
赤十字社員
愛國婦人會員
青年團員

四、行幸記念日の設定

父島に於ては七月三十一日を　行幸記念日と定め、適當の方法によつて記念することとした。

行幸關係の在鄉軍人分會及青年團は、當日若くは其の前後に於て、義務勞働を爲し、其の所得を基本金に積立つることと定めた。

五、行幸記念碑

父島及母島適當の地に行幸記念碑を建設することに決した。

六、村及在鄉軍人青年團への御下賜金の支途

行幸關係村及在鄉軍人青年團に下賜あらせられた恩賜金は、何れも其の基本金として積立て、漸次增殖を計ることにした。

七、桑苗の配付

農業の大宗である糖業不振の爲、副業奬勵中であつたが、本年度の試驗にて、養蠶の成績良好なので、特に　行幸記念として、全島農家に對し、支廳に於て桑苗四千本、小笠原島農會に於て同五千本を購入配付した。

又小笠原桑の殖林に關しては、營林署に於て別に計畫中の筈である。

八、小笠原オレンヂ苗の配付

小笠原島農會に於ては、本島特産の一である小笠原オレンヂの增殖を計る爲行幸記念として、同苗木を養成し、昭和三年度末に於て島內に配付することとした。

附　ジヨセフ、ゴンザレス氏の所感

ジヨセフ、ゴンザレスは、明治四年四月十四日本島大村に生る。資性篤實夙に鄕黨に畏敬せられ、明治二十四年歸化人世話掛を命ぜられる。同二十五年神戶英國傳道學校を卒業し牧師となり、日本聖公會に屬して布敎に從事し、現に同會長老である。本島開拓當初は東京府巡査となり又外國船出入每に通譯に從事し、早くから小學校兒童又は青年に英語の敎授をなし、選ばれて大村々民總代として村治に奔走する等、社會敎化並公共の爲に盡瘁すること三十餘年で本島　行幸の際に特に奉拜を許された。

If one where to look up on a map the Ogasawara Islands, better known to foreigners as the Bonin-Islands; he would see that they are but a group of islands not larger than pen dots. These islands however are not a few in number and the main island is Chichijima, or Peel Island. The name Peel was given to it after Sir Robert Peel who was Secretary of State in England when the Islands were said to have been rediscovered by Captain Beechy in the year 1827.

The Islands were named after Ogasawara Sadayori who discovered them in the year 1592.

So much has been written and said about the Islands that they are gradually becoming better kn-

own to the outside world.

In July of last year (1927) the islands were visited by, His Imperial Majesty, the Emperor. Of this visit one feels almost puzzled as to what to say or write; because he feels himself incapable of expressiing his thoughts and feelings in words or with pen and ink.

The news of this visit of His Imperial Majesty soon spread far and wide; and the result is, that, this group of pen dot islands has become so well known that one could wish there was some way of having them enlarged, even if it was only an enlargement on maps and charts.

As for the inhabitants of the islands there is no doubt that they now love and think far more of the islands than they did previously to the visit of the Emperor.

This must necessarily be so, for whoever would have thought that the Great and Good Emperor of the land of the Rising Sun would ever visit and be greeted by glorious Ogasawara Sun and the people living on these pen dot islands in midocean ?

His Imperial Majesty, accompanied by a suite Panded at 9. 15. a m. at a temporary pier set up at Omura.

Hundreds of the islanders were assembled at the pier waiting to receive and welcome His Imperial Majesty who responded cordially as he proceeded.

Certain preparations had been made to receive, welcome and show some sign or token of the joy and gratitude of the islanders at receiving a visit from His Imperial Majesty; but there is no doubt whatever that these outward tokens fail to reveal even a hundredth part of the true feeling and gratitude of the islanders; and perhaps the best way of revealing this feeling is by trying to be faithful and loyal subjects and do all one can for Emperor and Country.

His Imperial Majesty not only visited the school, the head guarters of the army office, the Government building of the Ogasawara Islands, where His Majesty received in audience representatives of the islands, (the writer being one of the number) but he also visited the little village of Okumura, where most of the naturalized people living there, and others living in other parts of the island had assembled to greet and welcome. His Majesty who responded to the villagers' greeting with a smile as he passed along under overhanging branches of tropical trees.

This visit of the Emperor deeply touched and warmed the hearts of the naturalized people, and they feel quite proud that they have been honoured by a visit of His Majesty to their village; and they are quite determined to keep this visit in memory fresh and strong as long as they are spared to live in this part of the land of the Rising Sun.

Rev. J. Gonzales

譯文

地圖の上にては外國人の間にボニン島(無人島)としての方がよく知られてゐる小笠原島の所在を探すならば、それはペンで打つた點よりも小さい程の、一群の島嶼が見顯はさるゝであらう。併しながら、この島嶼の數は少くなく、その主要なるは、父島即ちピール島である。ピールの名は時の國務大臣サー、ロバート、ピールのそれに因み、一八二七年、キャプテン、ビーチューが、この島を發見したときの命名と傳へられてゐるが「小笠原島」の名は、一五九二年に、小笠原貞賴の發見に由るのである。

さうして諸外國に漸次知れ渡つたことが、述べ且書かるゝに至つた。

昨年(一九二七年)七月、天皇陛下には、この小笠原島に行幸遊ばされたが、この行幸に由り、人々は何と申上げて好いか、又は何と書いて好いかと感激したのである。それは、彼等の思想や感情を十分言葉にも筆紙にも言ひ表はし得ないと思ふてゐるが爲に外ならぬ。

天皇陛下行幸の御豫報は忽ちにして擴がつた、それは、このペン尖の點ほどな小

島嶼が廣く世に知られた結果として、人々は、この島嶼を何とかして大きなものに(世人の注意を惹くやうに)したいことを望んだ、たとひそれが地圖や海圖を見た上に於てだけであるとしても。

小笠原島民はといへば、今や彼等は　行幸以前にその島嶼を愛しつゝあつたそれよりも、尙遙かに大きな愛と考へ方とをこの島嶼に對して抱き來つたといふことは、疑ひなきことでそれは誠に然かあるべきわけである。その故は、偉大にして仁慈深くましまず、日出づる國の　天皇陛下に在らせられて、大洋の眞中なるペン尖の點ほどの小島嶼に行幸遊ばされて、照り榮ゆる小笠原島の太陽と島民とが、陛下に敬禮を捧ぐるといふことは誰しも豫想され得るところではなかつたからである。

天皇陛下には、供奉員を隨へさせられ、當日午前九時十五分、大村に設けられた假棧橋に御上陸遊ばされたのである。

幾百の島民は、その假棧橋の下に於て、陛下の御着艦を待ち奉り、奉迎申上ぐべく參集した。陛下に於かせられては、懇ろに御會釋あらせられつゝ御進み遊ばされた。

陛下の行幸を御歡迎申上ぐる事及び行幸に對する島民の喜びと感激との象徴たる記念品の陳列を天覽に供し奉るなど、島には、種々の設備を整へたのである。さうして是等表面に現はされたる記念品が、たとひ何物であるとしても、島民の眞實な感情や感想の百分の一すらも表し得ないといふことは事實である。而も恐らくは信義ある、忠良の臣民たるべく、又力の及ぶ限り、陛下に、御國に盡すべく努力することが、その感じを表はすべき最上の方法であるであらう。

陛下には、學校や要塞司令部や及び島支廳―此處で　陛下には各代表者に拜謁仰付けられたのであるが（筆者自身も、その一人であつた）―ばかりではなく、大抵の歸化人が住居する大村の小部落までへも、御足跡を印したまひ、同時に部落民や、他の方面の者等までも、奉迎敬禮の爲に參集したのである。

陛下には熱帶樹木の枝々が掩ひ懸つてゐるその下を、御通過遊ばされつゝ敬禮の部落民に對し、御微笑を湛へさせられつゝ、御會釋遊ばされた。

吾等歸化人は、此度の行幸に由り、深く感動せしめられ、且心を暖められたのである。さうして彼等は、各々自分達の村々に　陛下の行幸を辱うした名譽を誇りとしてゐるのである。彼等は、日出づる國の此の一地方に住める限り、此度の　行幸

をば、心中いつ迄も〳〵生き〳〵と強くこの記憶を保つべく覺悟してゐるのである。

ゴンザレス

59
15

昭和四年十月二十三日印刷
昭和四年十月二十六日發行

東京府

印刷者　東京市京橋區北槇町九番地　西脇嘉市

印刷所　東京市京橋區北槇町九番地　一成社印刷所
電話京橋八一三番

59.
15

594
156